

日本生物學會誌

最終号 (上)



日本生物學會

1997年 1月1日

「日本生物学会誌」最終号（上巻）

目 次

小野喜三郎：よい本ちよつとつまみぐい	2068
第1編集局長：一研の思い出	2072
加藤喜代志：奥野良之助氏の人と仕事	2074
なまけもの：木と本	2081
佐藤卓也：さかな魚サカナ	2082
岡田侑子：はじめであわりのご挨拶	2100
長井幸雄：自然環境保全という名の自然破壊	2101
中山美香子：残念!! 「日本生物学会誌」	2102
平田幸雄：進化のゆくえ	2103
相生啓子：世紀末への鎮魂歌	2104
関西支部事務局長：総括	2112
関西支部：臨時総会報告	2113
田亀源五郎：雑木林が残されるために必要なもの	2114
ニセコロジスト：「何冊かの本」――思いつくことあれこれ	2115
農林水産部長：里山考（1）――農業問題	2119
：里山考（2）――里山を守ろうということ	2120

【編集局から】

ぼつりぼつりと、募集に応じて、光輝ある「日本生物学会誌・最終号」への投稿が集まってきました。その内容は実にさまざまで、まさに「日本生物学会誌」の最終号を飾るにふさわしいものと言えましょう。

最後の編集局長として、一度くらい「編集」の腕を振りたいと思い、投稿のすべてに目を通しましたが、《ウソつけ。「今読んだら、出たときの楽しみがなくなる」言うて、読まなかったやないか＝会長》なんとも編集のしょうがなく、例によって「無審査・無修正のうえ、無責任」に掲載する以外に方法がなくなりました。そこで、だいたい投稿順に並べただけです。だいたいというのは、同じ日に届いた原稿もあるからです。

ではみなさん、ごゆっくりとご鑑賞ください。

1997年1月1日

原稿大募集、会長命令に應じて筆無精の私も何かと思い、思いついたのがよい本の紹介だったので。さてその本は、

L. B. ホールステッド／田隅本生監訳

『脊椎動物の進化様式』法政大学出版局 2800円

です。

この著者のことは『科学朝日』に「今西進化論は現実合うか？」の論を、雑誌社の人と対話の形でのせられていたのを読んで初めて知ったのです。84年に京大地質鉱物学教室に日英交換教師として3ヶ月間滞在中に、今西進化論を精力的に調べたそうです。今西がよりどころをしている「すみ分け」が、後輩の可児藤吉の業績だったのを、彼が戦死してるので我が物とおもわせてることまで知ってるのに感心しました。同じような素材が別の結論に悪用されているのです。自然科学は自然を観察研究するのだから、今西説の根拠は成立しない、としています。ちなみに、訳者の田隅本生は、京大で徳田御稔の弟子で、最近の京大に愛想を尽かして定年を待たずに退職したことを、付記しておきます。

さて、本論に入りましょう。この本は、1：「脊椎動物の起原」から、17：「人類の未来」までにわたって整然と書かれています。ここでは、最後の人類に触れている2章をとり上げることにします。

16：「人類－武器製作者」の章で、著者の異色ぶりが伺われます。この章のなかにある「ネアンデルタール人を含む *Homo sapiens* 」のところを、異色の内容を紹介するために、そのまま引用します。へたなまとめや誤字を避けることができますから。狹いやり方、おゆるし下さい。

【引用1】

「これはいまでは *Homo sapiens* に含まれているが、かつてはネアンデルタール人 *Homo neanderthalensis* という独立の種とされていたものである。強大な眼窩上隆起をそなえ、オトガイのない突顎の顔面をもったこの種類はその当時の学界に大変な混乱を巻きおこした。ケーヴが指摘しているように、ネアンデルタール人は一般的につきのように描写される。『直立姿勢は不完全で、膝が曲がり、偏平足かつ内股である。後湾した背中が同じく後湾した“猪首”へそのまま接続し、頭部は脊柱から前方へ突き出ている。下肢は十分に伸展することができず、足の外縁で体を支え、足を引きずるようなぎこちない歩き方をする。』この描写はフランスのラ・シャペル・オ・サンから出た骨格にだいたい基づいたもので、アウストラロピテクスさえもがもっていた姿勢や歩き方とははっきり違うものである。事実このとおりだったとすれば、かれらはより類人猿に似た姿勢に逆戻りしていたことになるが、これは説明するのがむずかしい。なぜなら、現今の多くの種属よりむしろ大きい脳容積をもっていた（銘記すべし）、この退化した原始人は、何万年ものあいだに異常によく栄えていたからである。言うまでもなく、上記のような解釈は今世紀の始めの二、三十年間に、原始人というものに期待された観念を代表するものだった。しかし今日の知見からみると、これは“ビルトタウン人”などと同じように変てこなものである。そこでケーヴは、それまであらゆる復原の試みが基礎にしてきた化石骨格を調べ直した。その結果については彼の記述をそのまま引用するに如（し）くはない。

頭蓋はおそらく復原が間違っている。環椎は確かに誤りである。骨格要素が欠失し、あるいは不完全であるためにいくつかの重要な個所についての解剖学的研究が不可能である。脊柱は、とりわけ頸部で、もとの湾曲を正確に推定することが全くできないほどそのあたりに広がった、ひどい骨関節炎のためにゆがめられている。姿勢にとって重要な上部頸椎の形は極度に病的である。病変した歯突起はゆがんで

いる。環椎と軸椎とはもう正常に関節しておらず、第5、第6、第7頸椎では椎体と関節突起に病的変形がある。上部頸椎の椎間円盤は、死ぬよりはるか前に消失せんばかりに萎縮していたのに違いない。胸椎と腰椎は関節炎による顕著な変形を示し、老齢と椎間円盤の萎縮のため身長が低下している。このような変形性骨関節炎のひどさと広がりとは、控え目に言っても脊柱姿勢に関するプールの説明を疑わしいものにする。

頸椎について認められているその長さとか、棘突起が二分せず前方に傾斜していることとかは、これまで言われているような“サル型”の特徴ではなく、現代ヨーロッパ人に見られる変異の幅に入るものである。

仙骨および骨盤の破片に見られる特徴は、この動物が真正の直立姿勢をとっていたことを暗示する。大腿骨骨幹の湾曲の程度や脛骨頭の後湾の程度は既知の現代諸人種について知られている変異の幅に入るもので、かれらが常時なかば屈曲した膝関節をもってたという考え方を形態学的に裏付ける根拠にはならない。脛骨のねじれは正（現代人のように）であって、負（類人猿のように）ではない。そのため、いろいろな点で“超近代的”だった足はその指を外側へ向けていて、真の二足直立歩行の姿勢に役立つ構造になっていた。これ以上細かい点を数えあげるまでもなく、ラ・シャベルの骨格はプールの復元とは根本的に異なった復元——ネアンデルタール人独特の形態を否定するのではないけれども、この個体が現代人と同じように立って歩いたものであることを主張するような復元——の可能性を残すものだと行ってよい。

この骨格はひどい病気にかかっていたうえ、60歳ないし70歳の老人のものだった。キャルヴィン・ウェルズによると、その当時『40歳以上に生き残ったのは20人に1人で、80パーセントが30歳になる前に死んだ』のだという。たしかにこの老人は部族の人々から手厚く看護されていたと見られ、彼が埋葬された様式がまた彼の地位の高さを物語っている。実際、埋葬の様式から見て、来世かあるいは少なくとも靈魂不滅の信仰があったという印象がもたれる。」

この引用で言いたいことは、私が常々言っている「事実と真実」の問題の好例だということです。

つぎにとりあげるのは、ヒトらしさということについて、宗教的と文化的伝統にふれた一部分の引用です。

【引用2】

「第四間氷期のうちの一時的に温暖だった時期に、クロマニヨン人と呼ばれる近代型の人類がそれまでネアンデルタール人の住んできた地域に入りこみ、ごく短い期間のうちに完全にかれらに取って代わってしまった。しかし、それまでにネアンデルタール人が作りだしていた文化的伝統は引き継がれ、いっそう発展したようにみえる。石器の種類は著しく多様化したし、死者の埋葬はさらに手のこんだものになった。狩猟者はその商売道具といっしょに埋葬され、子供は飾り物といっしょに葬られた。いろいろな新機軸のなかで、おそらく最もひろく知られているものは“芸術”（Art）——これこそ人類を真に特色づけるものだという考え方もある——であろう。しかし、大文字の“A”がつく Art はわずかに数世紀前から現れたものである。もちろん、石器時代にはいろいろな形で余暇を追求するなどということがあったとは思えない。そのころ、芸術は社会における一つの機能をもったものだった。ある動物とか、要するに敵になるものの像を描くことにより、ひとはその相手の魂の一部をつかまえようとした。そして、その像がなにかの武器で突き刺されている場合は、観念的にだが、未来の獲物に重傷を負わせたことになった。こうした“予見”をもつことによって、狩人の自身が強まり、またそのために成功の可能性が著しく高まったのである。これと同じように、生殖上の目的をもったビーナス像を彫刻することは当の人々にとって大きな助けになったのに違いない。奥のところ、女性外陰部の絵はあま

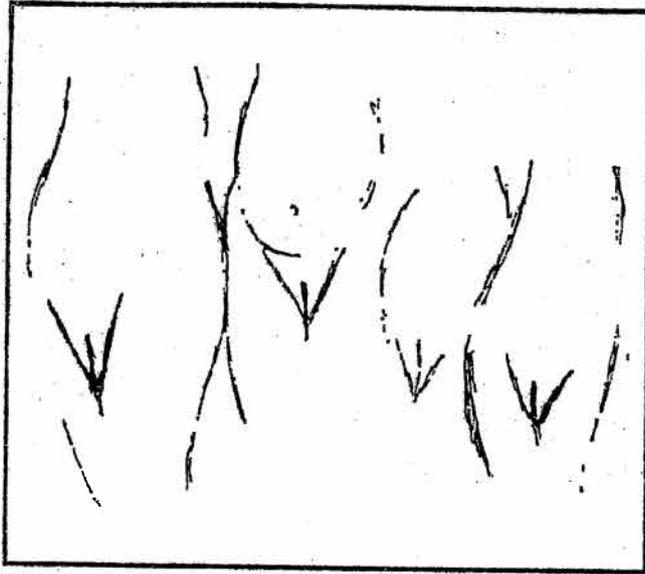


図46. フランスのヴィエンヌ県アングル・シュル・ラングランの旧石器時代の洞穴に刻まれたビーナス像。(Halstead Tarlo より)

たの時代を通じて相も変わらず描き続けられている。そうした画像が古いものであれば、その古さだけのためにある程度は尊重されるものになる。アングル・シュル・ラングランで発見された4体分のビーナス像(図46)は、出産を意味する北欧のルーン文字にあと形をとどめ、さらに生命のシンボルである木(これを逆様にすると死のシンボルとなる)としても名残りをとどめているように思われる。それは今でも現代社会のいろいろな方面で用いられており、例えばいわゆる核非武装の印しはこのシンボルに由来するものだし、二つのルーン文字をそのセンターリングがP字の幹を成すように組み合わせたものはキリスト教の象徴として今でも生きている。

さて、芸術家たる人間が現れたにもかかわらず、その生活はやはり狩猟に依存し、のちに牧畜に依存するようになった。生捕りにした獲物は飼いなされた。こうして家畜が発生したことが、新石器革命と呼ばれるもののために舞台を整えたのである。ゴードン・チャイルドは三つの要素、つまり定着して食物を生産する共同体の確立、動植物の飼育栽培および家庭用の土器類などをつくる技術の発達、ということの重要性を強調している。ジェリコでの発掘から、このような定着した共同体は約1万年前に確立された。」

最後の章、17:「人類の未来」から、最後の最後のまとめをそっくり。長い長い引用をとっくり読んで頂けたらー虫がよすぎるかな!

「現代先進国の社会、それらが共通にもっている一つの要素として、民衆全体が社会的標準というものにだんだん固定的に順応していく傾向が強まっていることがわかる。

異端的な人々はだんだん容認されなくなり、誰もみな自分が他と違っていることをわけもなく嫌う。そして一般に認められた行動基準に従ってさえいれば、生活は快適になる。北アメリカーたしかに母家長制社会であるーにおける順応主義の実態は、ナーサル(Nursall)が今から千年のちに人類はどうなるかを論じたさいに次のように書いたほど深刻である。『人間は社会的にうまく適応するようになり、おそらく不従順ということをした

やすくは容認しなくなるだろう。彼のかかえる悩みや喜びはすべて不自然なものとなろう。われわれが彼を失望の思いをもって予想するように、彼はわれわれをあわれみの念をもって振り返るだろう。』うんざりするようないくつかの展望は、今日のすう勢を未来に向かって外挿した時の論理的帰結にほかならない。ひとたび異端的なものが容認されなくなると、その社会は間違いなく多様性を失う。社会が多様性を維持することができなければ、ナースルの予言したような道をたどることになるだろう。このように考えれば、今日の先進的な社会ははっきりこの方向にむかっているとしか思えない。

しかし、これらはみなわれわれがすでに見てきたことなのである。いま繁栄している共同体はさらにいっそう繁栄し、しだいに特殊化し、“社会的にうまく適応”していき、そして急に足をすくわれることになる。これにたいして、原始的な共同体は突如として大勝を博することがある。迷歯類の進化の主流からはずれていたエンボロメリ類、擬哺乳類が放散していたところの半水生の主竜類、翼竜類が全盛だったころの森林性の鳥類、新しい型の哺乳類が爆発的に進化していたころにいた樹上性の霊長類、そして今世紀に入ってから、世界最強の国の一つとして立ち現われたロシアの遅れた農民社会、などがそれに当たる。もっと新しいところでは、中国が大国として出現したのがあまり突然のことだったので、米国などはまだ十分にこれ信じることができない有様である。人間の歴史というものは化石記録にうかがわれる類似した教訓を強調力説するもののようにみえる。つまり、最も先進的な共同体はそれよりいっそう進歩した共同体を生み出すのではなく、かえって自己満足に陥ってしまう。達成された豊かさが進化的な活力を徐々に弱らせていくのである。

もし脊椎動物の進化様式がこれまでと同じように続くなら、また将来それが続かないと考える根拠がないならば、今の世界における強大国の地位はやがてもっと大きな活力をもった新しい強国に奪われるだろうという結論を下さざるをえない。古生物学者の立場から世界の現況を眺めれば、未来の偉大な文明はアフリカの現在の混乱のなかから起こってくる、と予測することもできよう。アフリカは世界の他のどこよりも激しさと活力が渦巻いているところである。いやしくもどこかに人類の未来があるとすれば、それはここに違いない。進歩の基本は多様性であるが、アフリカではほとんど無政府状態とも言うべき大ざっぱさのうちにそれが存在している。

5億年にわれわれたる脊椎動物の歴史が教えるものの一つは、環境へ完全に適応しきることは究極的には破局につながるということであろう。これはかつてド・ピアが、脊椎動物の進化の全体的展望に対してのみならず現代の人間社会に対しても当てはまる警句にみじくも結晶させたとおりである。彼はこう書いている。『適応による栄光の道は、絶滅の墓場へ通じるだけである。』」

7局長：小野喜三郎さんって、たしか会長の先生だったですね。

会 長：そうや。3、4年前に米寿のお祝いをしたから、もう90歳を超えてはるのや。

7局長：すごいなあ。日本生物学会の最長老ですね。

会 長：学生のとて、コーヒーが飲みたくなると、この先生の所へいくんや。「先生、お茶飲みに行きませんか」「うん。行こ行こ」 ずいぶん飲ませてもらったなあ、大学の近くの進々堂という喫茶店で。もっとも、すごい合理主義者でな、一言不合理なことを言うと、3時間は覚悟せんならん。こんこんとお説教されてな。

7局長：ひょっとしたら、会長、例の「大脳の防御反射」教えてもらった先生じゃないんですか。

会 長：そうや。動物生理学の先生やからな。

7局長：ああ、わかった。講義して、「10人中9人まで眠らせてしまう」という先生ですね。

会 長：君も、いらんことだけ覚えてるな。

一 研 の 思 い 出

第1 編集局長

今でも時々学生の頃の夢を見る。夢の中ではいつも学寮の自分の部屋か、大学の一研に
いる。学生時代の後半は、一日の大半をこのどちらかの部屋ですごしていたような気がす
る。

一研とは、金沢大学が移転する前の城内にあった理学部生物学科生態学講座第一研究室
のことである。そこには会長がいていつも和文タイプを打っていた。学園紛争の頃は多く
の学生が入りびたっていたらしいが、その時はほとんど出入りする学生はなくひっそり
としていた。私がそこへ行くようになると、会長もからかう相手を見つけてよろこんだの
だろうと思うが、いつもコーヒーを入れてもてなしてくれた。

なぜ私がそこへ行くようになったかという、ゼミで話をしたのがきっかけだった。そ
れは参加者が数名の生態学演習か何かで、一人ずつ自分のやっているテーマを発表するも
のだった。私は水生昆虫の生態を調べ始めており、その時もトビケラ幼虫の生態について
発表した。そしてその結論部分でトビケラが何の役にも立たないように見られるが、川の
物質循環に重要な役割を担っているのだとしめくくった。直接人間の役に立ったり生産に
結びつく研究だけが大事なのではなくて、ほとんど存在も気付かれないような生物にも生
態系の一員としてその役割があり研究に値するものだと、今にして思えばいかにも素朴
な学生が考えそうな意見であるが、その時は気のきいた事を話したつもりだった。

その後のディスカッション（というよりは雑談）で、その頃の自分では思いつきもしな
かった考え方を会長から聞いた。どのように言われたかは思い出せないが、私が理解した
のは次のような事である。役に立たないように見える生物も実は役に立っているのだとい
う言い方を進めると、それでは本当に何の役にも立っていない生物は研究の価値もないこ
とになる。さらに言えばその存在の価値すらも認めないことにもなりかねない。

世間一般の生産性重視（そんな役にも立たない生物の研究がいったい何になるのかとい
う）に異論をとらなえたつもりが、実は役に立つことが必要という思い込みから一歩も出
ていないどころかよりとらわれてすらいたことになる。さらに問題なのは、そのような見方
を人間に対してもしてしまうということだ。すなわち人を役に立つか立たないかで判断し
てしまうことである。人間は何かの役に立たなければ存在する価値がないと、私は暗に思
い込んでいた。人間に対する見方が、生物に対する見方に重なっていたわけだ。

そのことに気付かされた時、私はとてもうれしかった。一種の解放感のようなものを感じ
ていた。何かの役に立たなければ存在する価値がないと、私は他の誰よりも自分自身に
対して思い込んでいたから。必ずしも誰かの役に立たなくてもかまわないのだ。

それまでの22年間、物心ついてからでも十数年間、私はただそれだけのことに気付か
ないばかりに、どれだけしんどい思いをしてきただろう。

この事がきっかけとなって、私はしばしば一研に行き、コーヒーを飲み、会長と話をし
たりからかわれたりした。あのコーヒーには密かに薬が入れられていて、それを飲むと真
面目な学生が悩むようになり、道を踏みはずすのだとよく聞かされたものだが、あれは本
当だったかもしれない。しかしそれはいわゆるマインド・コントロールではなくて、世間
が仕かけ自らよろこんではまりこんだワナからの脱マインド・コントロールだったと思う。

会長には何事にも、作るよりは壊す方が向いていると言えればおこられるだろうか。とも
あれ一研での長い時間は（およそ2年間、大学に行けばまっ先に立ち寄り会長がいなく
てもよく一人で壊れそうなソファにすわって本棚の膨大な書物をながめていた。今から思
えば一瞬のようにも感じられるが。）私にとって生まれかわるための時間であった。

こういう言い方をすると会長はぎつといやがるだろうと思うのであえて言うと、会長は
私の恩人である。普通は恩師と言うべきであろうが、もし私が一研での時間を持てなけれ

ば奥に多くの大事なことに気付かないまま無理な生き方を重ねた結果命を縮めていたかも知れないので、命の恩人と言っても言いすぎではない。ただ会長に言わせればそんなことを教えたおぼえはないときっとしらを切られることだろう。

これも会長に教わったことだが、ひとは全く知らないことを知るようになるのは原理的に不可能なことであるらしい。（確かソクラテスかプラトンか誰かがいったそうだが）。したがって我々は知ったと言うべきではなくて、本当は知っている事をしばらく忘れていただけなので、思い出したと言わなければならない。私も多分忘れていたことを会長によって思い出させてもらったと言うべきかも知れない。

しかしそれ以上のことは人間には不可能なのだから（最近になってこの説の正しさがよくわかるようになった。たとえ何時間話し合っても相手の知らない事を理解させるのは無理である）、会長にはいくら感謝しても足りないと思う。

この件に関して一つ思い出すことがある。私は何かの本で、鳥のさえずりについて書いてあるのを読んだ。ある鳥は生まれながら自分の鳴き方を知っているのではなく、他の成鳥の鳴き声を聞いて初めて鳴くことができる。ただしそれは自分が鳴くことのできる鳴き方を聞いた時だけで、どんな鳴き声を聞いてもそのとおり鳴くのではない。私はそれを読んで、ちょうど教師になろうかと思っていた頃だったので次のような教訓を得た。教師は自分が正しいと思う鳴き方を生徒全てにそのとおり鳴くよう押しつけてしまいがちだが、生徒にはそれぞれちがった自分の鳴き方があるのだから、それを思い出させるように鳴いて見せてやりさえすればよいと。

私は大発見をしたような気持ちになってさっそく会長に言ってみた。会長は大筋を認めてくれたが、最後にこう付け加えた。もし君が教師になって40人の生徒を受け持ったとして、40とおりの鳴き方で鳴こうとしても無理である。君は君の鳴き方を鳴いて見せて、それがわかる生徒が一人いればいいではないか。

この言葉が今の私にとってどれほど大きなものかは計り知れない。私達は40人全ての教師であろうとして、生徒自身の鳴き方を無視して専制的教師になったり、自分自身の鳴き方を無視して良心的（偏善的）教師になったりする。私は専制的になるまいとして、うっかり良心的教師になってしまうところであった（多分なろうとしてもなれなかっただろう）。

今私は公立高校の教師になって、時には保身のために少しばかり専制的になったり良心的になったりするが、基本的には誰が何と言おうと（最近誰にも何にも言われなくなってしまったが）自分の鳴き方を通すことにしている。それでも一人の人間が自分の鳴き方を思い出してくれれば、会長に受けた恩は返したことになるのではないかと思っている。

ともあれ私にとって、一研はとても大切な場であった。それまで挫折らしい挫折を経験しないで大学まで来て初めて落ちこぼれた時に、自分が落ちこぼれたことをはっきりと自覚し、それを受け入れることができたのは会長を始めとする一研で出会った人々のおかげである。（そのうちの一人には後に仲人までしてもらった。重ねて感謝します。）そして自分に必要な場所を必要な時期に絶妙のタイミングでさぐりあてた自分を、とても運の強い人間だと感心している。

奥野良之助氏のひとと仕事

加藤喜代志

戦後日本において、多くの人々にその死を惜しまれた人々は少なくないが、今年はなぜか、小生にはそのような人が多いように思われる。一方では、渥美清、沢村貞子、他方では武満徹、大塚久雄、丸山真男といった戦後日本のとりわけ中高年層の人々をとらえた人々たちである（といっても、前者のグループと後者のそれとでは「ファン」層は異なるが）。

小生はここに奥野良之助氏（以下、小生は呼び慣れている「奥野さん」と書かせていただく）を加えて、かれを「亡きもの」にして「惜しむ」という無礼・悪ふざけをするつもりは毛頭ないことを念のため断っておく。小生はこの駄文の読者（いるとしての話だが）と奥野さん自身が、この「悪ふざけがすぎる無礼な」書き出しの真意が、上記の人々に劣らず奥野さんがこの大学から「去る」ことを小生が非常に惜しんでいるということにある、ということを理解していただけるものと甘い期待を抱いている。

ここで小生はひとまず、同僚としての奥野さんの退官とそれとともに終刊となるこの『日本生物学会誌』を惜しみながら、小生がこれまで約15年ほどのあいだに受けてきた恩義に心からの謝意を表したい。

「ほんとうにおしんでいるなら、『編集局長』を引き受けろ」と奥野さんからいわれる（「編集局長じゃなくて、「会長」だよ＝会長）のが落ちなので（引き受けたとしても、伝統ある学会と学会誌に泥を塗り、また多くの読者を失望させて、遠からず廃刊に追い込まれることは火をみるより明らかだし、いまやかれはその続刊を断念し、終刊号へむけて日夜、精力的に原稿執筆に取り組んでいることは読者もご承知のとおり）、小生は終刊号への原稿募集に乗じて、失礼を顧みず（そして自らの恥を顧みず）奥野さんの人となりを少しばかり記して、小生のかれへの謝意としたい。

とはいえ、会員の多くは小生以上にかれの人となりをご存じであろうから、ここには目新しいことはなにもないかもしれないことをあらかじめお断りしておく。

畑違いのしかも若輩の小生が奥野さんと出会った経緯については後述のとおりだが、そのような者がかれの研究者としての「仕事」に言及するのは無茶であるのを百も承知で、そのうちのほんの一部についてふれながら、業績「主義」がますます幅をきかすなかで、まれにみる「自由な仕事師」としての奥野像の一端にふれてみたい。

ところで、近年、文部省をはじめとする大学内外での「自己点検・評価」が大合唱されるにつけ、業績「主義」の風潮の強まりのなかで、多くの「研究者」は内容よりは、とにかくできるだけ早く多くの論文なり本を書かなければならないというプレッシャーの下に置かれる。小生も例外ではなく、「不幸にも」それをはねのけるだけの能力も気力も失ってしまったので、またそのような「主義」になじめないから、相変わらず「業績」をあげられずに肩身の狭い思いにおそわれるのが実情である。

それにしても、なにを言おうとしているのか、またそもそもなにを書いているのかよくわからない「業績」、筆者はそれを「大業績」にするためか、繰り返しや長々とした引用をするために、読みすすんでいくうちに、筆者の言わんとするところ――あつてのことだが――をつかみかねることがよくある。《これ、会長のことですか＝7局長。どうして？＝会長。だって、会長の「『種の起原』を読む」とか「『実践論・矛盾論』を読む」とか、「長々とした引用」が出てくるじゃないですか＝7局長。目的が違ふよ。あれは「大業績」にするためじゃなくて、単に50号まで続けるための「穴埋め」だものな＝会長》したがって「面白くなく」疲労感だけが残る。しかし小生は、自分の能力・気力の不足も手伝って同じような轍を踏み兼ねないという不安に襲われて、なかなか筆がすすまない。もちろんそれでは業績「主義者」を批判する資格はあっても、批判力はないだろうことぐらいは承知している。

それはともかく、ここで小生がいたいのは、自分が本当に研究したいこと（テーマ）を自分のやりかた（方法）で自分のペースでやるという意味での「自由な研究」を、たとえ不利な条件と環境のなかであろうと頑固なまでに追求することに喜びや意義を見出している研究者は、いつの時代でもそうかもしれぬが、そうざらに在るわけではないだろう、奥野さんはそういう「自由な研究者」のひとりだ、ということである（ご本人は苦笑するだろう）。

そのような研究の多くは、いろいろな点で（ここで詳細に論じる余裕はないが）「学界」にも「官界（文部省）」にも評価されることはすくないかもしれない。しかしそんなことは「自由な研究者」にはもとよりたいした問題ではないだろう。それよりも問題なのは、つぎのような傾向・風潮である。学生にむかって「大学は自由に自分のテーマをみつけて研究するところ」と常日頃言っている教授先生が、あるいはそれさえも口にせず「業績」をあげることにしか頭のない教授先生が、はじめから自分の講座の「助手の助手」として自分の研究のために「学生」や「院生」を「教育」とか「指導」の名のもとに「小間使い」していることがひとつ。これはとくに自然科学系統に多いとき。

もうひとつは、「科学研究費」をもらうために「研究テーマ」を無理やり決める、つまり自分がほんとうにやりたいと考えているテーマではなく、「科研費」が「あたりそうな」テーマを設定するから、運よく「あたっても」所期の「成果」はおぼつかないから、おざなりな「報告書」ですます（年度末にそれを書くのに忙しくなる）。そのうえ、予算の単年度主義のため、余らないよう「消化」するための「研究」や「出張」で忙しくなる。しかも「科学研究費」をもらう（これには「学会」の有力者に人脈があると有利になるようだ）ことが研究をしている証しと思っている節さえある「研究者」がいる。かれらは「科研費があたった」と得意気にいう。こういう教師のもとでたまたま自分のやりたいテーマがみつかったも学生はそれを公然とは研究できないし、「講座」のテーマと異なるテーマをもって「講座」にはいつてきた学生は「窓際族」的學生となることを覚悟しなければならぬかもしれない。

そういう学生が結構いると知ったのは、奥野研究室を訪れるようになってからである。奥野さんの言葉をつかえば、かれらは「落ちこぼれ」の学生である。しかしかれらはこの研究室では、生き生きしていた。卒業後のかれらが「落ちこぼれ放し」でいるとは聞いていない。これをもて奥野さんは「自由な研究者」であるとともに、学生の潜在力を圧殺することなく、逆にそれを引き出し育て「良き教育者」でもある。研究と教育とは表裏一体のものであるべきだとわかっている、その両立がなかなか困難であることを痛感しているひとりだが、「研究」に熱心であればあるほど、「教育」したがつて「学生」がそのための「手段」と化していることに無頓着な人が多いなかで、肩肘はずに自然体で、その両立を体現している人、それが奥野さんである。

それにしても、競争原理を導入して研究を活性化させるという近年の文部省や財界・審議会の方針にもとづいて「基本給」にあたる研究費を削り、「科研費」といういわば「歩合給」で「国家・国民にすぐ役立つ」研究（たとえば「癌研究」とか「宇宙科学研究」（ビッグ・サイエンス）など）には手厚い補助をするという研究のあり方は、今後の大学（教師と学生）のあり方を大きく（小生からすると、好ましくない方向、つまり人間個々人の自立性とか主体性、自由などというそれこそ「近・現代社会」が追求してきた理念からますます遠ざかる方向に）変えていくことだろう。

それでは奥野さんはどのような『仕事』をしてきたのか、以下に主なものをあげよう。

『磯魚の生態学』 創元社 1971

『生態学入門—その歴史と現状批判』 創元社 1978

『人と生き物48講』 どうぶつ社 1979

『さかな陸に上る—魚から人間までの歴史』 創元社 1987

『金沢城のヒキガエル—競争なき社会に生きる』 どうぶつ社 1995

これらのうち、昨年出版した『金沢城のヒキガエル』についてだが、それについては「学会誌」にその反響ぶりが奥野さん自身によって紹介されている。《ぼくじゃないよ。6局長と7局長が出したんだよ=会長。まあ、そういうことにしておきましょう=7局長》それはかれの「ヒット」作であるが、そうなったのは本の「表題（副題をふくめて）」が読者をひきつけたところもあるだろう。しかしなによりも読ませる「内容」（口マンチックなヒキガエルの生態描写とともに、過当競争の現代日本社会を批判）のゆえである。そしてそのみならず、読みやすい「文章・表現」でもあったからだと思える。かれの他の著作も、読んだことのある人ならうなずかれることと思うが、「専門」書ではあっても門外漢にも一般の人にもあまり抵抗感なく読みすすむことのできるものばかりである。しかも自然科学の「学者先生」には挿入しにくい、逆に「専門」でないという気楽さもあってか、「アカデミックでない（といわれそうな）」あるいは少々「おちよくなったような」社会・国家批判、さらにはその実例として一般読者にはなかなか知りえない職場〔大学〕の実態への歯に衣をきせない批判やそこで割りを食わされている人達——かれ自身もふくめ、とくに多くの非常勤職員や「落ちこぼれ」の学生——への共感の眼差しに出くわすとあれば、少々専門的な箇所があっても我慢して読みすすめられるし、否、それ以上にワクワクして読みの速度があがるというものである。

こうしてかれのなめらかでカラシのきいた文章に引き込まれていったひとは少なくないであろう。門外漢の小生もそのひとりである。小生は内田義彦（数年前亡くなった「経済学者」。『資本論の世界』や『社会認識の歩み』（ともに岩波新書）の著者といえば、ご存じの方もおられよう）を想い起こす。というのも、内田はたんなる「専門書」でもなく、またたんなる「啓蒙書」でもない、一種の「人」文学書を、経済学という専門領域から書くということをめざしてきたが（かれの『作品としての社会科学』（岩波）などを参照されたい）、奥野さんはそれを生物学（生態学）でやっているという印象をもつからである。

「専門書」とはきわめてしばしば、「専門家」以外の人々には理解できないはずの「むずかしい」書物というのが通念で、素人にわかりやすい本は「啓蒙書」であって、それは「大家」とか「権威ある人」が書くならいいが、「専門家」のあいだではあまり評価が高くないようだ。というのも、「学会」やそれを構成している「学者先生」のなかにはしばしば無意識のうちにも、「やさしいこと」「むずかしくないこと」を「学問的でないこと」さらには「まちがっていること」とさえ、したがってそのようなことを書いたり語ったりしてはならない（権威がなくなる——権威があつての話だが）と本気に思っている人が少なくないからである。否、それよりも「むずかしいこと」を「やさしく」書いたり語ったりすることができる力量がないからかもしれない。「妙な」むずかしさが読者を減らし、したがって価格は高くなり、これがまた読者を減らす、そして若者の活字離れに拍車をかけ、「悪循環」はつづく（「教科書」に指定しないかぎり、あまり読まれない）。もちろんそうでないものやそのときどきの「流行」にも助けられて、逆に多くの読者——この場合、大半は学生であるが——を獲得することがある。たとえば広松渉『存在と意味』（岩波）とか平田清明『市民社会と社会主義』（岩波）。最近そのようなものをみかけたという記憶はない）。

「専門」と「啓蒙」の両者を両立させるには、思考の明晰さやするどい観察力、それを表現する表現力（文章力）の豊かさが求められようが、かれの場合には日本の社会や「アカデミズム」への「軽やか（!?）」だが「厳しい」批判精神がそれにつけ加わる。つぎの一事をかれ一流の学界・官界（文部省）への辛辣な批判ないし「挑戦」ととるか、あるいはたんなる「遊び」「悪ふざけ」さらには「嫌味」「妬み」「ひがみ」ととるかは読者の自由だが、長年、頑迷固陋な講座（制）の教授先生と闘ってきた奥野さんの研究者としての自立性・主体性を示していて、小生には忘れることのできない事柄のひとつである。

それはこうである。『金沢城のヒキガエル』には削除されているが、その前身となる最初の論文の末尾に、かれは「この研究は文部省科学研究費の交付を受けていない」旨、わざわざ記しているのである。本誌の読者のなかにも御存知の方もおられよう。この学会誌

ならいざ知らず、れっきとした「アカデミック」な学会誌にである。それにしてもこの学会誌の編集部がこれを削除しなかったのは、「包容力」のためか、あるいはかれの「反論・反撃」を恐れたためか、小生には知るよしもないが、聞いてみたいものである。《うっかり見逃したんじゃないかね=会長》

「生真面目な学者先生」とりわけ自然科学の学者先生にしてみれば、奥野さんの書くものは「邪道」で「不真面目」そのもの、唾棄すべきものということになる。そしてそのようなことは、それこそ佐高信のような「毒舌家」のすることとされているかもしれない。とはいえ、かくいう小生も「生真面目な学者先生」のはしくれだったというのが奥野さんの見方であった。この学会誌で小生の文章を読んだ記憶のある方なら、「フルートゥス、おまえもだ！」といわれることだろう。それでも小生は奥野さんの「薫陶」を受け、「生真面目」からなんとか「生」がとれて（「気」が抜けて！）「真面目」になった、とかれから評価されるようになった。もう少し時間があれば「不真面目」になれることであろうに、残念である。《まだ大分「時間」があるじゃないか=会長》

つぎに、広い意味でのかれの「仕事」あるいは言動からうかがえる奥野さんの人間像の一端を印象風に記してみたい。まず、かれとの出会いから。

専門分野もちがい（小生はヨーロッパ近代政治・社会思想史という、今や学生にとってどうでもよさそうな領域で生活の糧を得ている）、したがって学部もちがう（かれは理学部、小生は教養部。最近解体されて、小生は法学部に分属の身だが）、そして年齢も10年もちがい、小生が赴任して5年ほどしかたっていないのだから、よほどのことがなければ顔見知りになることなどない。その奥野さんを知ったのは、金大教職組においてである。

それは小生が赴任したときからすでに表面化していた城から山間地への大学「移転」問題に、組合が本格的に関わりはじめた頃（15年くらい前）である。「ラブ・コール（！）」はなんとかれからである。それにはわけ（魂胆!?）があったようだ。当時、かれの所属している理学部は経済学部とともに移転推進学部であったが、小生のいた教養部は唯一反対していた。当然、それぞれの組合分会もほぼ同じ考えであるから、組合の会議ではふたりは衝突しておかしくない。ところがかれ個人の言動はかならずしもはっきりと移転賛成ではなかった。それどころか、「正論」を展開することによって、ときには直接的に、ときには間接的にわれわれ教養部の姿勢を援護さえしてくれた。学内部局のなかでも組合（組合とは弱い立場のものに理解を示す団体であると思っていたのだが、甘かった！）のなかでも教養部は孤立を余儀なくされていたし、当時、まだ学内事情にうとく「人脈」もないに等しかった気の小さい小生はかれの言動に随分元気づけられ、分会書記長としての責務もかろうじて果たすことができたし（ときに「査問委員会」に喚問されかねないような言動をとれたのも孤立無援ではないという気持ちをもてたからであった）、腹のたつまた憂鬱な会議も任期後半にはいくらか「楽しめる」ようにさえなっていた（「業績」主義者のごとく、それぞれの「分会ニュース」発行で競争をしたが、このときは惜敗）。《号数ではそっちの勝ちだよ。もっとも、「スキー大会・参加者募集」まで1号にしてたけどね=会長》

いうまでもなく、これによって奥野さんは当然、移転推進の急先鋒のひとりであり「組合におけるかれの上司」である若いゴリゴリの書記長をはじめ、学部の同僚の多くを敵にまわすことになるのであるが、かれにはそれを意に介する気配がみえなかったし（すでに「講座制問題」で孤軍奮闘していたのだから当然だったのだろう）、自分の「上司」をコントロールすることを「楽しんでる」風にさえみえた。かれは書記長にとって、そしてまた理学部とりわけかれの所属する生物学科の教授たちにとって「目の上のたんこぶ」でありつづけたのである。とくに歴代の「教授先生」たちは後には、かれと対決してもかなわぬことを知るにつれ、なかば無視、なかば諦めの態度を露わにしていたようである。今述べたように、かれは悪名たかい「講座制」との闘いのなかでも、「生物学科ニュース」を頻繁にだし、「教授先生」への執拗な攻撃を展開していた。それは感情的でなく、事実

の冷静な判断と分析にもとづく理性的な、ときに「おちよくり」を含んだ鋭い「攻撃」であったから、「教授先生」たちはついつい感情的になって、ただ大声をあげるしかなかったようである。

小生は幸いにもそれまで「講座制」のきつさを味わうことがなかったので、奥野さんの会話とこの「ニュース」によって大学とか講座制とか、あるいは大学「教授」の実体のなんたるかを（大学教師の「生態学」）をあらためて楽しく勉強させてもらった。「おかげで」小生は知らぬ間に理学部に「敵」をつくってしまった（「敵」の「敵」つまり奥野さんの「味方」になってしまった）格好であるが、これこそかれの「魂胆!？」のひとつであった（といっても、小生個人にそれほどの期待を寄せてのことではなく、小生もその一員である教養部（とその組合）にいくらかの期待を抱いていたのだと思うが）。

そして小生が「教授」になったとき、奥野さんとかれの親しい数人の同僚——この人たちがまた奥野さんと同様、魅力と個性にあふれているのだが——の常日頃の主張に同調してきた自分が、かれらの非難の俎上にのぼらないよう言動に気をつけねばならないことになるのは当然であるにしても、これもかれの「魂胆」のひとつであったかもしれない。幸い、いままでのところかれらに決定的パンチをくらうような「不始末」はしでかさずにすんでいる。かれらには奥野さんと同様に「教授」になってもおかしくないのに、「講座」の教授のために昇格できない人もいれば、「教授」になれるのに、辞退し続けている頑固な教養部の「趣味人!？」もあり、また「教授」になっても、「助教授」時代に変わず、スバリとももの申すという人もいるのだから、無意識のうちにも「教授先生」的言動でもとれば、「蔑視されたり、袋だたきにあう」こと必定である。《そんなことしませんよ。せいせい「おちよくり」くらいですよ＝F女史。それが恐いんだよ＝加藤》

もちろん小生には「教授」になったからといって、肩で風をきるような歩き方などとも恥ずかしくてできないタイプの間人になっていたし、ちょっとばかり高い給料が欲しかった！だけのさもしい人間でしかないから、つねに緊張してかれらとつきあう配慮など不要であったといっている（そうでなかったら、とっくにかれらから身を引いていただろう）。かれらとは職名、年齢、「業績」、性別、貧富 etc. がどうであれ、みな「平等」にそして「本音」に近いところでつきあう——最低の「礼節」を重んじることは当然だが——ことができるのだから、最年少の小生にとって「居心地」がいいのは当然である。この「奥野サロン」ともいべき「共同体」は、したがって「上下関係」を機軸に交際することに慣れている「学者先生」や「教授先生」には、居心地は必ずしもよくないだろうし、そもそも奥野サロンに出入りすることは理学部では「危険」視されかねないのだから（あるいは「されかねなかった」のだから）、そのような先生や学生が気軽に入出入りするはずもない。

ついでにいえば、教養部は70年代の大学闘争時代に〔小生の赴任前に〕、恣意的な人事の回避などの民主的な諸「改革」を行ったが、そのおかげで小生はたいした「業績」も「人格」もなく「教授」に昇格できた。ところが「講座制」のいまだ強い生物学科の奥野さんは「教授」に優るとも劣らない「業績」と「人格」を有しながらも（否、「業績」と「人格」を有しているが故に、というべきかもしれない）、「教授」への昇格を阻止されてきた。《残念ながら会長に教授の「人格」はないね。とても今の教授のやってることなど、できるはずはない。ほくもそうだけど＝S助教授》

他方、天皇が石川県へやってきたとき、植物の説明役をつとめた「講師」は退官直前、「二階級特進」して「教授」となったが、奥野さんとかれとのあいだにそれほどの違いがあったとはとても思えない（これは当該講座の配慮より理学部としての配慮だったようだが、それだけになおさら「天皇制」に呪縛された「近代（金大）的」知性のなんたるかを象徴していて興味深い——その「教授」に小生はなんの恨みもちあわせていないが）。《会長に、能登島水族館で天皇の案内をさせようと計画したんだがね。いや、教授になったら会長がどんな顔をするか、ちょっと見たかったのでね＝数学科元教授・不名誉会員第2号》

奥野サロンがこのような「危険地帯」であると認識するのにたいして時間はかからなかったが、そこから遠ざかるよりは、「危険地帯」と知るにつれ、かえってそのサロンは小生をひきつけてしまった。とにかくこのサロンの「水」（ほとんど奥野さん自身が用意してくれるコーヒーであるが）は、小生には苦いどころか甘かったのである（この水を飲みつづけたためか、数年にして小生は「糖尿病」になってしまった！そしてさらに3年後、奥野さんと同じく胃を大部分切る羽目に陥って、「同病相哀れむ」ではないが、かれとの親交は深まってしまった！）。

この出会いの後、かれの半世紀の経歴を知るにつれ、かれの言動、姿勢——昔風にいえば（全共闘的にいえば）「連帯を求めて、孤立を恐れず」とでもいえようか——にすっかりひきつけられるようになっていった。その言動や姿勢の根源はかれ自身のいうように、先の世界大戦における日本の敗戦体験にあるとっていいだろう。かれも他の多くのことと同様に「軍国少年」であったそうだが、敗戦はかれに「すべてにたいする不信感あるいは懐疑心」を植えつけたらしい。それがかれを「自由な研究者」に仕立て上げたのかも知れない。「えらい人」は必ずしも「正しく」もなければ「えらくない人」の味方でもなく、それどころか「うそつき」で容易に庶民の「敵」になると直感したのだろう。かれの「権力」（いわゆる「政治権力」だけでなく）にたいする警戒心はもとより、抵抗感はこのとき以来はぐくまれたかのようである。「大阪人」らしく「楽しく」「ネバッコク」抵抗することにかけてはかれの右にでるものは、少なくとも金沢大学にはいないであろう。《それが一人、いるんですよ＝会長。変なこと、変なところで言わないでよ＝F女史》

日本が湾岸戦争の前後にPKO問題で揺れたころ、かれの呼び掛けで結成された学内有志による「平和問題ネットワーク」は、《呼びかけたのは林教授だよ＝会長》学内外でのピラ配りや学内での討論集会など細々としてはあるが、運動を継続してきた。「ネットワーク・ニュース」の発行はかれなくしては今日まで続かなかったであろう（実質的に奥野さんの編集——新聞記事の紹介を中心にその分析やかれ自身の意見その他の投稿からなる——によって、すでに100号を超えている——単純平均すると3週間に1号の頻度で発行してきたことになる）。奥野さんは「生物学会誌」の終刊はやむなしと思ったことだろうが、「ネットワーク・ニュース」はメンバーのだれもが継続しなければならない、あるいは継続させたいと思っているにもかかわらず、遅々としてその見通しがはっきりしないために、最近少々、苛立っているようである。上述のように敗戦を体験した奥野さんには、沖縄米軍基地問題の再燃と安保再定義にたいするわれわれ若い世代の反応が「鈍い」ともどかしく感じられてしょうがないのだろう。

「老いて、益々盛ん」なかれの行動力には、最近少々「古い」を感じ始めた（!!）小生などにとって驚きでさえあるが、同時に、穴があいたら入りたくなる心境にさせられる。むかし、魚を追って海に潜り、陸ではソフトボールに興じて（ピッチャーとか）培った体力はセルフ・コントロールよく、いまだにそれを発揮できる持続力はすばらしい。学会誌にも書かれていたように、車の運転は若手顔負けなほどの走行距離だし（「分会ニュース」のときのように、それで奥野さんと争ったことがあるが、完敗——小生の15,000キロ/年にたいし、奥野さんはそのとき3万キロ以上だった）、かれは先述したように書きはじめたら、実にはやい。2～3ヶ月で一冊書いてしまうとご本人がいうほどである。《書き始めたら2～3ヶ月もかからないよ。『磯魚』は5日だし、『入門』は10日で書いた。ワープロならもっと早く書ける。もう書かないけどね＝会長》

奥野さんを知らない人は、以上のような拙文からも、一体この人はどういう人なのだろう？ 並の「老人」ではなさそうだと想像をかきたてられることだろう。胃を大部分切除り、頭も大分薄くなり、肉も落ちてきたが、心身ともに小生より若いとは！ しかも無類の愛妻家であり、子煩悩である。《会長は愛妻家というより恐妻家でしょう。恐「F女史」家でもありますしね。最近の子煩悩から孫煩悩に進化しました＝7局長》

金沢大学には小生を含めて千数百人の教師がいるが、このような個性あふれる研究者・

教育者はいったい何人ぐらいいるのだろうか。「宮仕え」を終わって、一層のびのびと著述に、また温泉めぐりに精をだされることと想像するが、小生としてはいささか寂しい気持ちを抑えられない。しかしかれの退官を歓迎しホットする人も依然として少なくないであろう。大学はその意味でいまだにあまり変わっていないのかもしれない。

小生はかれこそ「名誉教授」の称号を授与されてしかるべきだと思っているが、それは現在の制度のままでは「夢」でしかない。たとえそれが改正されても、ご本人は辞退するだろうが。「名誉教授」授与の基準はずいぶん「緩和」され「民主化」されたが、それだけに「名誉」（だれがだれにたいして名誉なのだろうか？）は「安売り」気味で、それにもかかわらず、「助教授」以下の教師には授与されないというのは「差別」ではないかとの思いをもってしまう（その次は「勲章」ということになるのだろうか）。この称号が社会的にたいした「損害」をあたえないのであれば、目くじらたてて、どうのこうのといわなくたっていいではないか、という声が聞かれそうだが、あるいはそうかもしれない。しかし小生は、上述の事例からだけでも、たとえその資格をもつにいたっても（その前に没したり、くびになったりせずに）、その受取りをお断りすることをすでに決めている。かつて100人以上の学生がいるクラスで小生はかれらに、将来、小生が「名誉教授」という肩書きでどこかにあらわれているのを目撃したら、「ウソ」をついたのであるから、軽蔑してもらって結構である旨公言したことがある。

それはともかく、月並みではあるが、奥野さんのご健康と一層のご活躍を祈って筆を擱くことにする。お目通し感謝致します。

木 と 本

――ろうそくの炎は、消える直前にふっと明るくなる――

な ま け も の

もうすぐ、日本生物学会がなくなる。それまでに、学会誌を切りよく50号まで出すのは「ちょっと無理ですな」（42号、1714ページ）と会長自身が言っていたのに、もうすぐ50号を越え、そのあと何号まで出るのか見当がつかない。まあ、よく出るものだ。

しかし学会誌の紙も、もとはと言えば木から作られたものだ。たとえ再生紙を使っても同じ事、どんどん出せばそれだけたくさん木が切られることになる。木より価値のある本など、どれくらいあると言えるのだろうか。《君のカイメンの論文くらいやろ=会長》だからせめてこの文章は、なるべく短く、これで終わらせることにしようと思う。《いくら短くしたって、1ページは使うんやからな=会長》

さかな魚サカナ

佐藤 卓也

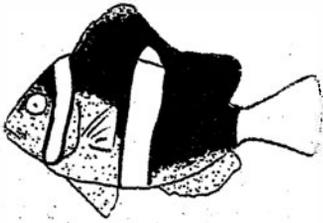
今、フナを3匹とドジョウを2匹飼っている。フナは2年以上、砂利を敷いて藻にひっそりと覆われたミカンの木を沈めてある45cmの水槽で泳いでいる。たぶんナガフナだろう。5cm程になって、朝夕、餌を欲しがって水槽に決まった角に浮いてくる。採ってきた時はメダカと同じ位で2cmを少しこえる大きさだった。ドジョウも2年近く飼っているが、今泳いでいるのは3ヶ月しかたっていない。たしか4代目と6代目である。4代目が11cm、6代目が15cmで両方とも雌。よく太っている。ようやく馴れてきて、フナといっしょに浮いてきているが、時に2日も3日も顔を見せない。そんな時は、先代までと同じように飛び出し自殺をしたのかと心配するが、そのうちにひょっこりと顔を見せて安心させてくれる。5代目も3代目以前のドジョウも、しばらく顔を見せない時に、水槽を置いてある棚の下や裏を覗くと、ホコリまみれの干物になってころがっていた。ただし3代目は、飛び出した所にイシガメ2匹が棲んでいるプラスチックのコンテナがあって、頭と背を少々残すのみの無惨な姿となった。

もうひとつ45cmの水槽があり、これには1cm前後の川エビが入っている。数は不明、種類も調べていないのでわからない。何年いるかも忘れた。50匹か100匹か、2年か4年か。数回新たに川から採ってきているので、最初からの個体はもういないと思う。勝手に侵入したサカマキガイとカイミジンコ？がのさばっている。一時、コツプムシ（イソコツプムシ？）を近くの小沢で採ってきて同居させておいたのだが、いつのまにか消滅してしまった。スナヤツメの2cm弱の幼生も入っている。はず。行方不明になっているが、もし無事ならば水槽の底の砂の中で有機物を食べて成長し、1998年の春頃に15cm程の立派な成体となって出現するであろう。この水槽は、今まで一度も水を換えていない。カマツカやヨシノボリが入っていたこともあり、フサモか何かがおいしげっていたこともある。数匹のメダカを飼っていた記憶もある。それら全ての老廃物や遺体が、分解されて砂の間にたっぷりと入っている。きっとスナヤツメも餌に不自由してはいないだろう。

120cmの大きな水槽にたっぷりと砂を敷いてドブガイやマメシジミを入れ、水草をたっぷりと植えて、メダカやエビを少しだけ入れて飼うのが夢である。せめて小さな水槽をあとふたつ置きたい。水槽を置いて水草を植えるのは春がいい。水を入れてしばらくおいた水槽に、池や水田水路の泥の中からひろい集めてきた、水草の新芽や越冬芽を大事に大事に植えつける。根づいてよく育った時に、魚をちよっぴり入れる。別に理由があるわけではないけれど、魚を飼うならば近所の池や川で自分で採ってくるべきだと思っている。だから熱帯魚を飼ったことはないし、これからもたぶん飼うことはないと思う。どこにでもいて子供の遊び相手になってくれる、ハヤ、フナ、メダカといった魚が好きである。飼っていても楽しい。こうした魚を大事に、しかし過保護にならないように飼っていると、驚く程美しくなる。そうなるを見ていて飽きないし、よく育った水草の間でゆっくりと泳いでいると、満足してくれているのかも、などと考えて妙にうれしくなる。

このように水草の前でニタニタできるようになるには、やはり春、これから水草が成長するという時に働かなくてはいけない。しかしついつい、気がついたら水が暖かくなって水草もかなりそだっている季節となっている。上手にすれば、そのような時でも水槽をととのえられるけれど、そうすると小まめに世話をしなくてはいけないし、私はそこまで真面目ではない。いちばんいい時に始めれば、ほとんど手間をかけなくても水槽は日々変化していく。それをただ、何もしないでながめているだけがいい。

卒業研究は、和歌山県白浜でおこなった。奥野先生に面倒をみてもらったおかげで、テナントウムシから逃れられた。研究と言う程のことはしていない。水中メガネをしてシュノ



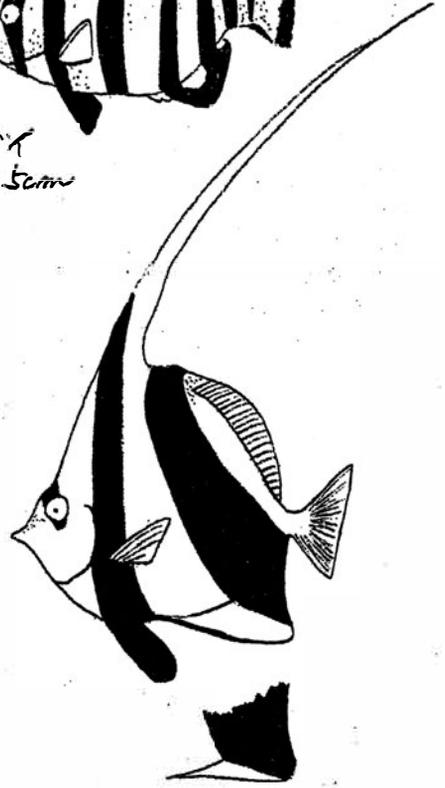
クマニ雄 5cm



イタダイ
若魚 5cm



シテヤッコ若魚
黄色 3cm



シテハダダイ
5cm

ハダダイ 10cm
↓
△ハダダイの
1/2程度
ハダダイと似る。



ーケルをくわえて海に入り、魚を見ていただけである。奥野先生のみならず、瀬戸臨海実験所の人びとには御世話になった。感謝します。

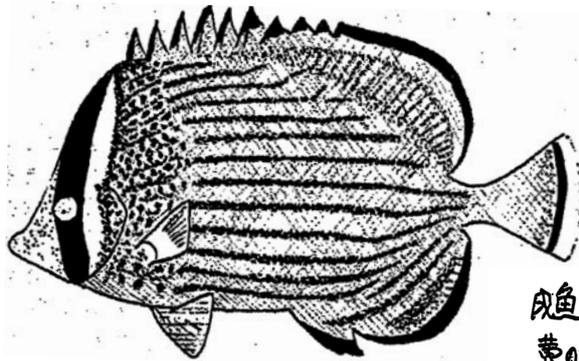
海は初めてだった。釣りにはよく行っていたし、前年に佐渡ヶ島と下田（伊豆半島）で海中をのぞいてはいた。しかし本格的に海へ入ったのは最初だった。とまどうこともあったし体力的にしんどかったのも本当である。しかしたくさん魚を見ていれば忘れられた。楽しかった。卒論はクロサギという魚についてまとめた。本人も疑っている結論を平気な顔をして書いて完成させた。DNAやら泳動ゲルやらなんやらかんやら横文字と数学とひかう卒研発表会で、横文字は4語だけ使い、日時と水深と魚の数以外は数字を口にしないうで発表した。本当は横文字をいっさい使いたくなかった。けれども20年程前に、やはり白浜でクロサギを研究した人が、その報告を英文でしていたためにそれができず、くやしき思いをしたことを今でも憶えている。惨憺たる内容だったことよりも、そちらの方がくやしかった。

先日本棚のいちばん下をひっくりかえしたら、白浜でのフィールドノートが出てきた。ノートの内容は大したことはないが、それといっしょに出てきた魚の絵が意外とおもしろい。白浜で魚を見たりノートをまとめたりしていない時に、魚を覚えるためと暇なのとで図鑑を見ながら描いた絵である。あまりたくさんはない。もう少し描きたして、白浜の魚という文章を書こうかと思ったが、うまく描けない。やはり毎日生きた魚を見ていたからこそ、一冊の図鑑を参考にしただけで描いていたのだと思う。生きた魚を見なくなったら、何冊の図鑑を参考にしても線の死んでいる絵しか描けない。姿形は表現してあっても、生きている魚が持っている“感じ”“雰囲気”といったものは、図鑑には表現されていない。先日描いてみたヨスジフエダイは、気のせいかな家で飼っているフナに似ている。キリンミノは魚屋でよく見る、カサゴやメバルと同じ眼をしている。というわけで、白浜で描いた絵だけを使う。必要に迫られて描きたしたものが少しあるが、線がごちないのですぐにわかと思う。白浜で描いた絵をながめつつ、思い出すことを記してみる。

チョウチョウウオが、平たい体で直線的にかなり速く泳ぐのには驚いた。もっと優雅に泳いでもよさそうなのに、糸でひっぱられているように行ってしまう。胸鰭を大きく動かし、しかし他の鰭をほとんど動かさずに泳ぎ去る後ろ姿は、平たい体の両側で動く胸鰭の上下動だけがよく目立ち、名前のとおり蝶蝶である。蝶のように派手で、様々な模様の種類がいるからチョウチョウウオかと思っていたがそうではないらしい。昔、どこかの海の中で、この魚の泳ぎ去る後ろ姿を見て蝶の飛ぶ様子を想った人がいたのだろう。

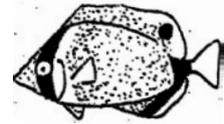
チョウチョウウオの仲間、あまりにも姿そのままに名づけられてしまったのがハタタテダイだろう。背鰭の最初の方の棘が伸びている。旗を立てていると見えなくもないが、もう少し他の名前でもいいのではなからうか。ハタタテダイの仲間は、3種類見たと本人は信じている。かなり臆病で近づいていくとすぐに岩陰に隠れてしまっ、なかなかじっくりと見られなかったので、私の識別がどこまで正しいのかわからない。これによく似ているが、縁もゆかりもないのがツノダシという魚。どのくらい縁もゆかりもないかというと、日本産魚類検索という枕みたいな図鑑で400ページも違う。ハタタテダイの仲間よりもツノダシの方によく出会った。しかしツノダシは、目つきが悪いので嫌いだった。こちらハタタテダイのように近づきにくい魚だったが、ハタタテダイは子供がすぐに母親の後ろに隠れてしまうような雰囲気だったのに対して、ツノダシは泥棒ネコが車の下に駆け込むような感じがした。偏見もここまでくると立派である。

ツノダシとハタタテダイは、絵や写真で見ると目つきに違いがないけれど、実際に海の中で見てみると違うのである。ハタタテダイは背鰭の第4番目の棘が、ツノダシは第3番目の棘が伸びている。ちなみに棘はキョクと読み、鰭を支えているカサの骨みたいな奴のことである。正確には、カサの骨のうちで骨化がすすんで固いのが棘条、柔らかく分節があるのが軟条。どうでもいいなどと思うなかれ。魚類学者はこの数をかぞえて魚の名前を調べているのです。解説がちょっと詳しい魚の図鑑には、必ず各鰭の棘と軟条の数が書かれてある。ちなみにタチウオの背鰭には、122本から142本の軟条があるそうです。ハタ

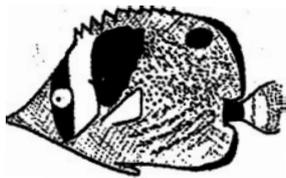


成魚 10~15cm
黄の地上に褐色の帯

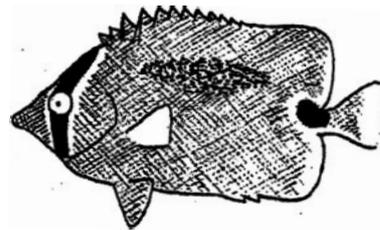
チロウチロウオ



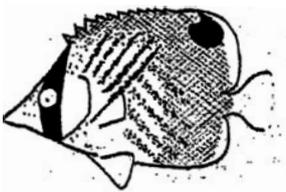
若魚 3cm
黄



チロウハン 若魚
黄
褐色 4cm



スミツキトノサダイ若魚
青
黄 7cm



トゲチロウチロウオ若魚
褐色 4cm
黄色

ヤスジチロウチロウオ
蓝の地上に黒の
横帯



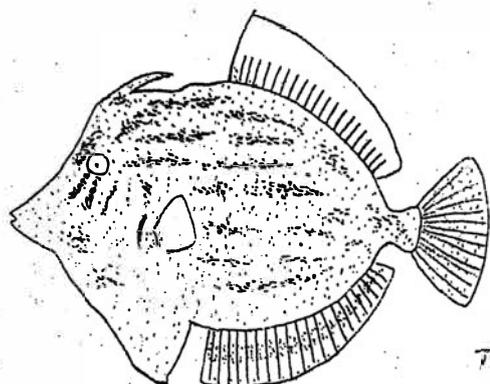
タテダイもツノダシも、この長く伸びた棘の先が折れていたり、棘についている膜質部がさけている個体が少なくなかった。どちらも自分が背負ったものにおかまいなく、岩の隙間の奥へ奥へとひそんでいってしまう。そんな時に傷つけてしまうのだろう。棘に傷を負った魚を見ると、必死で生きているのだと心をうつものがあるなどと書きそうだが、そんな気持にはならなかった。むしろ元気のいい子供が、いつも切り傷やすり傷を持っているのを見るようなもので、少しは気をつけなさいと小言のひとつも言ってやりたくなる。

近づくと岩陰に入っていく魚ばかりではない。後ろ向きに砂の中に埋まっていくアナゴやイソギンチャクに潜り込むクマノミもいた。私がいつも魚を見ていた所には、オオサンゴイソギンチャクとサンゴイソギンチャクがあり、この中に大抵一匹から二匹のクマノミがいた。クマノミとイソギンチャクというとりあわせがあまりにも有名なので、初めて見た時は感激した。二回目、三回目も感激した。四回目は、しなかった。すぐにクマノミがイソギンチャクの中に潜り込んでしまうので楽しくなかった。クマノミの重そうな色と形も好きになれなかった。一度、イソギンチャクがまわりにない水深5メートルか6メートルの所で、水面地殻を元気よく泳いでいたクマノミを見たことがある。あれはいったいなんだったのだろうか。

ニザダイを見た時はもっと感激した。『磯魚の生態学』で既にお近づきになっていたせいである。これがあのニザダイかと思った瞬間に深い方へ去って行ってしまったが、この仲間のニセカンランハギやクロハギは、海に入ると必ずとっていい程お目にかかった。あまりにもしょっちゅう出会うのでメモするのを忘れ、ノートをまとめる時にゆっくりと思い出して、数匹の群れが海底をつつきながら泳いでいたのを見ていたのに思いあたってノートすることが数回あった。このような記録のし忘れは、あつてはならないことであるけれども、私は時々する。花を見に山へ登っても、トンボを見に田んぼに行っても。いばれることではないのだが。

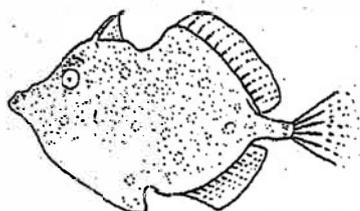
ニセカンランハギとクロハギは、尾鰭のつけ根の少し前にあるとげの色で区別する。最初のうちは何がなんだかわからなかったが、毎日見ているとかなり遠くからでも区別できるようになった。とげの色の他に、背鰭の模様や顔つきも異なっていたので、それらをあわせた全体の“感じ”でわかるようになった。しかし今となっては、どこがどう違っていたのかまるで覚えていない。この二種類は体の色調が軽薄（失礼！）だが、ニザダイは青の混ざった黒で、品がある。どこかで見た色だと思っていたら、奈良・平安の頃に作られた黒色土器と言われる、施釉土師器のそれであった。深く、暖かい、なれなれしくない色である。

9月中旬、大型の台風が硫黄島あたりにある時、白浜はもう台風のうねりが来ていた。水深が3メートルより浅いところだと、底の砂がまきあがっていて視界がきかない。もっと深い方は怖いくらい透明で青かった。魚の様子もいつもと違い、どことなくあわただしかった。砂浜には様々な漂流物が近づき、またうちあげられていた。岸近くで揺れている漂流物の間には、ニジギンボ、マツダイ、トビウオなどの幼魚が見られた。ニジギンボは低木についているイモムシのようであった。マツダイは枯れ葉に似ているうえ、両側からべったんこにされた平べったい体を波にあずけ、横になり縦になりして、漂流物の中で完璧な漂流物になっていた。それでもまだ、魚に見える。ンツと思つて視線を戻し、もう一度よく見るとマツダイの姿がわかる。最初の一瞥でマツダイであることがわからなくとも、ただの漂流物ではないことはわかってしまう。しかしトビウオの幼魚はまったくわからなかった。完全に枯れ葉かなにかにかと思つてしまった。偶然近づいたときに突然消え、それで始めてンツと思つた。2cm前後の子供なのに立派に飛ぶのである。それを水面下から見ているから、飛ばれると本当に「消える」。わけがわからなかったが、3回目か4回目、つまり3匹目か4匹目にようやく気がついてその場で立ち上がり（水深は60cm程しかなかった）、飛ぶのを上から見て消える理由を理解した。しかしまだ正体は分からない。いったいこれはなんなのか。だいたい前も後もわからない。小さいのに40cmも50cmも飛ぶので、上から見ていても不用意に近づいたりするとたちまち「消える」。甲殻類かその幼生、も

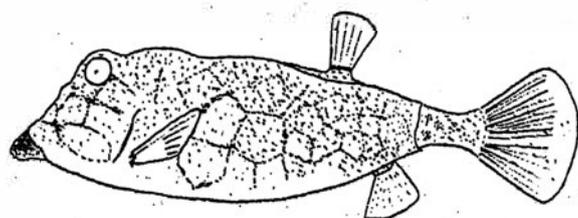
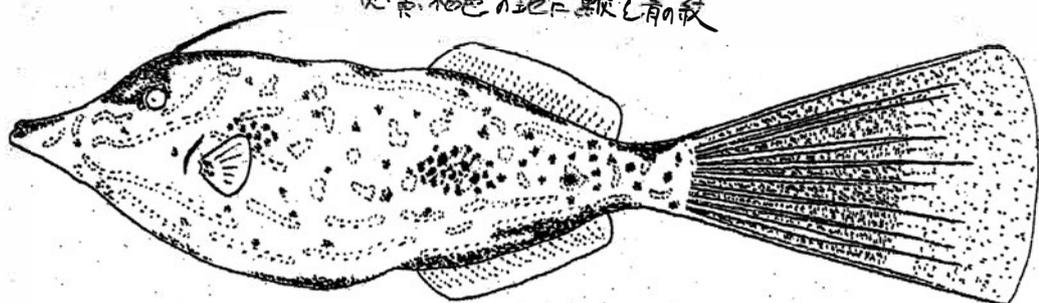


カワハギ
10~20cm
白灰・灰褐色

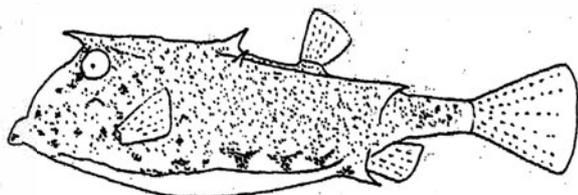
アミハギ
5cm



ソウシハギ 30cm
体色は一晩で変化する。
背景は褐色の地に黒と青の紋



ハコフカ 15cm 暗灰色



ウミスズキ 10cm 灰色

しくは或る種のクラゲかと考えた程だが、なんとなく蝶か蛾のようだと思った時、たちまち小学生の頃によくながめていた魚の図鑑にのっていた一枚の写真が蘇った。そのおかげでトビウオの子とわかり、わかった瞬間になぜか楽しくなり笑ってしまった。笑うと同時に波に足をとられてひっくりかえった。

よく見ると、マツダイの子もトビウオの子も漂流物の中に点々といた。いつもはもっと沖にいるのに、台風のうちねりによって岸へ近づいてきてしまったのだろう。泳ぐ力が弱いから、波に押されるままだと思う。次の日は海が荒れて、波打ち際にはヤシの実や流木、いろいろなゴミが打ち上げられ、その間に目が大きくて昼の間は岩の間で群れているクロホシイシモチや、未確認浮遊物体のごとく水底にそってすべるように進むクロイシモチが打ち上げられていた。前日見たマツダイやトビウオは無事だったのだろうか。

よく似た種類がいくつもいる魚がいる。ニセカンランハギの仲間やチョウチョウウオもそうである。しかしペラやハゼ程ややこしくはなかった。よく似ていたり似ているのがたくさんいると正直、区別するのはうんざりである。しかしそうした仲間の中で特によく見かける1種か2種が、他はわからなくてもその種類だけはなんとかわかるようになると、他の種類もそれを土台にして区別できるようになっていった。うんざりしていたのが、わかるようになると楽しくなる。ごく簡単なスケッチをして、海からでたらすぐに図鑑で調べることが何度も何度もくり返して覚えていくしかない。Aというのがわかれば、AとBはここが違う、AとCはここが違うといった具合に区別できるようになる。

フグの仲間はどれも個性的で覚えやすかった。ただし似ているのは徹底的に似ているために、最後まで混乱をしていた。

ペラの類とヒメジの類は、自画自賛だがかなり正確に区別していた。しかし今は昔である。この類を見ていて、魚の区別は体型、斑紋、目つき顔つきの三つだと思った。海の中だと正確な色はわからない。赤はくすみ、青は生き生きとしている。透明度、水深、天気など、その時その時、その場その場で全て違う。色はそのように変化するが、濃淡明暗はそんなに大きく変化しない。だから体側にある帯や紋、鰭を走る条などはきちんととらえられる。ちなみに魚の場合、頭から尾に走るのが縦帯、背から腹に走るのが横帯である。理由は、魚を頭を上にして尾を下にして立てた状態で縦横を決めるから。慣れるまでややこしいが、慣れても時にややこしい。とは言っても、アジ型もヒラメ型もアンコウ型も同じように表現できるからかえって便利なのだろう。

ヒメジの類でもっとも派手、もしくは多色なのがオジサンだろう。そして体の前半にある模様は、個体によって変化することが多い。この派手な魚も海中で見ると、赤も橙も黒っぽく見えて、灰色と白のまだらにしか見えない。この魚は、背の後方に黒褐色の横帯が2本あり、その間に白の横帯があるが3本の横帯とも背と腹の中間で終わっている。この模様は、黒褐色が黒や灰に見え、白が白灰や黄に見えても、暗帯2本と明帯1本と覚えておけばとまどうことはないし、体の他の部分の模様が様々に変化しても比較的安定しているようで信頼できる。オオスジヒメジは、口から目を通って縦帯が1本走りこれが体後半で切れる。そして尾の前方に紋がひとつあらわれる。同じように縦帯が1本走っても、尾まで続きさらに尾鰭に斑紋があるとヨメヒメジである。またヨメヒメジは、ヒメジの中では背が低い方だ。

こうして覚えていく時、体色とか帯や紋の色はとりあえず必要がない。体の中で、どこが明るくてどこが暗いか。1匹の魚の中での明暗の比較だから、水深にも天気にもほとんど左右されないはず。明暗でとらえた模様、濃淡でとらえた模様で覚えればいい。これだけでもかなり細かく区別できる。そのうちに自然と色も覚えていく。見たことのない魚に出会っても、正確に体色の濃淡明暗をとらえられるようになる。

体型も大切である。背が高いか低い、いちばん高い所は背鰭の前にあるか中間あたりにあるか。鰭の形や位置。鰭の形や位置は、図鑑だと全ての鰭をきちんと広げた形で掲載されている。けれども泳いでいる魚は鰭を半分だけ広げていたり、速く泳ぐ時は全て閉じ

しくは或る種のクラゲかと考えた程だが、なんとなく蝶か蛾のようだと思った時、たちまち小学生の頃によくながめていた魚の図鑑にのっていた一枚の写真が蘇った。そのおかげでトビウオの子とわかり、わかった瞬間になぜか楽しくなり笑ってしまった。笑うと同時に波に足をとられてひっくりかえった。

よく見ると、マツダイの子もトビウオの子も漂流物の中に点々といた。いつもはもっと沖にいるのに、台風のうちねりによって岸へ近づいてきてしまったのだろう。泳ぐ力が弱いから、波に押されるままだと思う。次の日は海が荒れて、波打ち際にはヤシの実や流木、いろいろなゴミが打ち上げられ、その間に目が大きくて昼の間は岩の間で群れているクロホシイシモチや、未確認浮遊物体のごとく水底にそってすべるように進むクロイシモチが打ち上げられていた。前日見たマツダイやトビウオは無事だったのだろうか。

よく似た種類がいくつもいる魚がいる。ニセカンランハギの仲間やチヨウチヨウウオもそうである。しかしペラやハゼ程ややこしくはなかった。よく似ていたり似ているのがたくさんいると正直、区別するのはうんざりである。しかしそうした仲間の中で特によく見かける1種か2種が、他はわからなくてもその種類だけはなんとかわかるようになると、他の種類もそれを土台にして区別できるようになっていった。うんざりしていたのが、わかるようになると楽しくなる。ごく簡単なスケッチをして、海からでたらすぐに図鑑で調べることを何度も何度もくり返して覚えていくしかない。Aというのがわかれば、AとBはここが違う、AとCはここが違うといった具合に区別できるようになる。

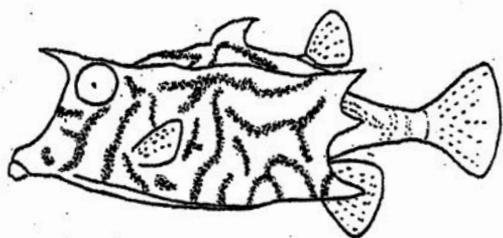
フグの仲間はどれも個性的で覚えやすかった。ただし似ているのは徹底的に似ているために、最後まで混乱をしていた。

ペラの類とヒメジの類は、自画自賛だがかなり正確に区別していた。しかし今は昔である。この類を見ていて、魚の区別は体型、斑紋、目つき顔つきの三つだと思った。海の中だと正確な色はわからない。赤はくすみ、青は生き生きとしている。透明度、水深、天気など、その時その時、その場その場で全て違う。色はそのように変化するが、濃淡明暗はそんなに大きく変化しない。だから体側にある帯や紋、鰭を走る条などはきちんととらえられる。ちなみに魚の場合、頭から尾に走るのが縦帯、背から腹に走るのが横帯である。理由は、魚を頭を上にして尾を下にして立てた状態で縦横を決めるから。慣れるまでややこしいが、慣れても時にややこしい。とは言っても、アジ型もヒラメ型もアンコウ型も同じように表現できるからかえって便利なのだろう。

ヒメジの類でもっとも派手、もしくは多色なのがオジサンだろう。そして体の前半にある模様は、個体によって変化することが多い。この派手な魚も海中で見ると、赤も橙も黒っぽく見えて、灰色と白のまだらにしか見えない。この魚は、背の後方に黒褐色の横帯が2本あり、その間に白の横帯があるが3本の横帯とも背と腹の中間で終わっている。この模様は、黒褐色が黒や灰に見え、白が白灰や黄に見えても、暗帯2本と明帯1本と覚えておけばとまどうことはないし、体の他の部分の模様が様々に変化しても比較的安定しているようで信頼できる。オオスジヒメジは、口から目を通って縦帯が1本走りこれが体後半で切れる。そして尾の前方に紋がひとつあらわれる。同じように縦帯が1本走っても、尾まで続きさらに尾鰭に斑紋があるとヨメヒメジである。またヨメヒメジは、ヒメジの中では背が低い方だ。

こうして覚えていく時、体色とか帯や紋の色はとりあえず必要がない。体の中で、どこが明るくてどこが暗いか。1匹の魚の中での明暗の比較だから、水深にも天気にもほとんど左右されないはず。明暗でとらえた模様、濃淡でとらえた模様で覚えればいい。これだけでもかなり細かく区別できる。そのうちに自然と色も覚えていく。見たことのない魚に出会っても、正確に体色の濃淡明暗をとらえられるようになる。

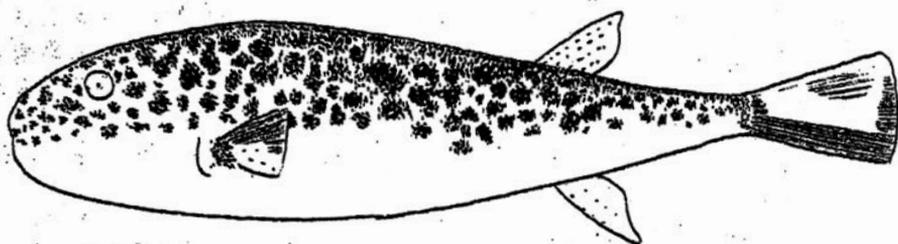
体型も大切である。背が高いか低い、いちばん高い所は背鰭の前にあるか中間あたりにあるか。鰭の形や位置。鰭の形や位置は、図鑑だと全ての鰭をきちんと広げた形で掲載されている。けれども泳いでいる魚は鰭を半分だけ広げていたり、速く泳ぐ時は全て閉じ



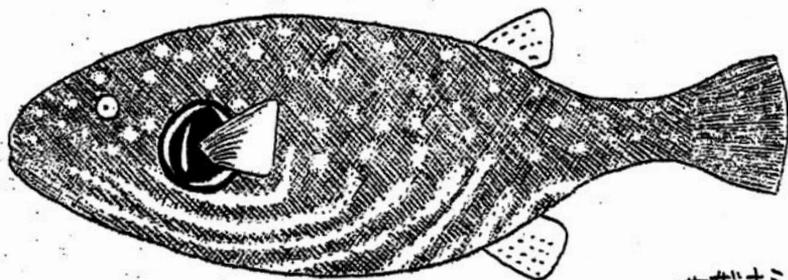
シマウミスズメ 10cm
黄灰の地に青のしま



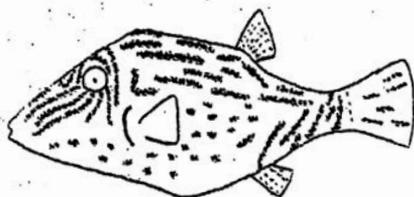
クサツグ 2~5cm
灰色の背と明点



シロウサイツグ 20~30cm



サガナミツグ 20~30cm



キタマクラ 10cm
眼が緑
青のしま



カマスバウ 15~25cm
黄、褐色、緑と
体色は様々

ていたり、逆に静止していると全ての鱗を大きく広げていたりとその時その時で違う。けれども図鑑に紹介されているような無理な広げ方はまずしない。だから海の中の魚の様子で覚えていくしかない。せめて水槽の中を泳いでいる魚で覚えたい。こう書くと大変そうだが、そのうちに自然に覚える。と言いたいが、私はけっこう苦労した。しかし、魚が遠くにいる時や一瞬しか見えなかった時は体型しか手がかりがないし、それだけでも思った以上に識別できる。一度岩陰から20cm程の魚が飛び出してきて、次の岩の彼方へ消えたことがある。それも視界の隅をかすめただけだったが、イスズミかその近縁種だとわかった。イスズミと出会ったのはこれが最初で、このあとも2回ほど会っただけである。しかしこの魚が、どこか間のびしたような特徴的な体型をしているので今だに忘れられない。ヒメジの仲間をしつこく見ていたので、一瞬の出会いでも体型をきちんととらえられたのだろう。

目つき顔つきというと、そんなものが魚にあるかと反論されそうだがあるのである。ただかなり主観的なものだ。体型や体の模様ならば図で記録できるし言葉でも説明できる。目つきとなると難しい。ニシキベラは悪く、カミナリベラの雄は悪そうだが案外といい。イトベラはいい。キウセンはいいような悪いような。これは自分で実際に海の中を泳ぐ魚を見て判断するしかない。

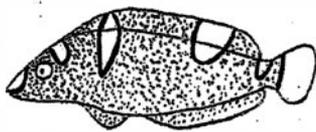
このように体型、目つき、体の模様を組みあわせて、ベラやヒメジといったよく似た種が多い仲間も、そうでない魚も区別して覚えていった。全て忘れてしまったが、いちばん多い時で80から100の魚を区別していたのではないだろうか。最初は大変だったが、いつのまにか覚えていた。図鑑を見てそれだけの魚を短期間に覚えるのは、はっきり言って無理だと思う。生きた魚をくりかえし見ていたからこそできたのだろう。

しかしハゼだけはどうしてもならなかった。小さくてすばしっこく、似たようなものが多い。落ちつきがないのでゆっくりと見られず、どれを見ても同じに見えた。そのせいか好きになれず余計に区別を気にもならなかった。ハゼは採集して、じっくりと見て水槽で飼って覚えるか、タンクを背負って海に入りひとつずつスケッチをするしかないのではないだろうか。

どうしてもならなかったのが他にもいる。フダイとボラだ。フダイは一匹一匹の様子が異なっていたし、すぐに逃げていってしまってちっともゆっくり見ることができない。追いかけてまわしたこともあったが、フダイだと思ったら全部フダイに見えたし、タイワンフダイだと思ったら全部タイワンフダイに見えた。結局わけのわからないままで終わり、困そうな粗い鱗だけが印象に残っている。後日思ったところでは、大半がフダイだったようだがよくわからない。

ボラはもっとわからなかった。というよりも、ボラ、メナダ、セスジボラ、コボラ、フウライボラ・・・。白浜になんという種類のボラがいて、そのうちの何が一般的かどうか知らなかったが、知っていても区別しようとは思わなかったろう。この仲間はどれもすこぶるよく似ていて、口の中やそのまわり、眼のまわりといった細かな形態によって区別をする。こんな魚を海の中で区別できるとはとても思えなかった。ハゼと同様、つかまえて区別をできるようにしてから、海の中での区別に挑戦するべきだろう。ただ、ハゼやボラを海の中で区別できるようになれば、海の中がそれだけ広くなるだろうし楽しくなるだろう。事実、どうしてもならないと思っていたメジナとクロメジナの区別ができるようになったら、クロメジナばかりの群れにメジナが何匹か混在しているとか、今の小群は珍しく全てメジナだったなどと、世界がひとつ広くなって楽しかった。この2種を区別しようと思ってこの群ればかり追いかけていたら、そのうちなんとなくわかり、しばらくしたらはっきりわかるようになった。胸鱗のつけ根、鱗の粗さ、尾鱗の明暗。体の高さも違った。不思議なもので、区別がつくようになるとこれだけ似ている2種が入り交じって群れを作っている、見た瞬間にあれとあれがクロ、あれとあれとあれがメジナと区別できた。この2種の区別がつけられるようになったのはかなり自信になった。

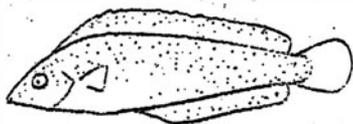
これ程苦労しなくても区別できたのがイスズミの仲間だ。いつも数種を目にすること



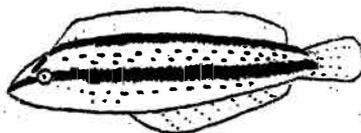
ウツハシ若魚
4cm 橙赤色に白紋



ホシハシ(若魚) 3cm
褐色に白、青の紋



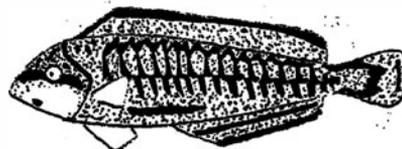
ホシハシ 雌 10cm
桃色



キウセン 20cm
雄... 緑し白
雌... 桃し白



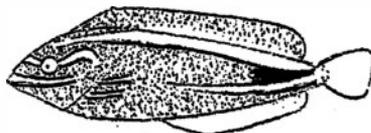
ホシハシ 13cm
一赤 青 尾は黄



ニシキハシ 13cm
赤 青



カミナリハシ 雌 7cm
背は桃褐色 口は黄
胸鰭のつけ根は黒



カミナリハシ 雄 10cm
縦帯は青入白



若魚 4cm
黒に青帯



ホシハシ 14cm
背は桃色 2本の縦帯は
濃い赤紫、腹は白



ホシハシ 10cm
黒に白帯
尾には青帯
成魚 10cm

ができたので、すぐに基本となる魚を覚えられたせいだろう。なわばりを持ち、そこに入って来る体型が自分と似ている魚をしつこく何度も追いはらう、ねずみ色をして目つきが卑屈なセダカスズメダイ。黒い中にボツンボツンと白点があってやけに目立つミツボシクロスズメダイ。ツユクサの花がそのまま魚になったようなソラスズメダイやナガサキスズメダイのにぎやかな群れ。赤と黄色と青と黒と白を、2cm程の小さな体に同居させているメガネスズメダイの幼魚。水面近くで群れるでもなく散らばるでもなくにぎやかに泳いでいたオヤビッチャやロクセンスズメダイ。

メガネスズメダイの幼魚には数回、岩礁の底近くの隙間でお目にかかったのだが、強烈な印象を残してくれている。始めて出会ったのは息苦しくなって水面に向かいかけた時だったが、岩にしがみついてスケッチをした。模様が入りこんでいて色がたくさんあったし、なによりあまりにもきれいだったので夢中で描いた。かきあげたと同時に息が切れていたのを思い出して、あわてて水面に向かった。息を整える間も惜しんでもう一度潜り、しみじみとながめて心底持って帰って飼いたいと思った。ダーウィンがウソつきであると思ったものだ。あんなにきれいで、派手だが少しも嫌味のない魚が小さな変化のつみかさねだとか、自然の中での場所のとりあいなどで生まれるわけがない！ 後日なんとなく考えていて、メガネスズメダイの幼魚はベニシジミという、私のもっとも好きな蝶によく似ていないかと思ひあたった。それからは以前にも増してこの魚が好きになった。

キピナゴもきれいな魚だった。中層から表層にかけて、水色の線のかたまりがあらわれる。ひとつひとつが光をきらめかせて、銀になったり深緑になったりする。底から群れのまん中につっこんで行くと、群れの中に空間ができる。右も左も光がきらめき、水色が躍る。以前はもっと大きな群れに会うことがあったようだ。その中に入ると、魚のきらめきしか見えなかったとか。私の出会った群れは、その中に入っても魚のきらめきの向こう側にある水が見えた。今でもどこかに、何も見えなくなる程の群れがいるのだろう。沖に出ると会えると思う。

時々、このキピナゴの群れの下にカマス科の魚が見られた。アカカマスだろう。しかしこれだけ、光と線がゆらめいていては、1匹のキピナゴに狙いをつけるのは難しいのではなからうか。とはいえ、いったい何匹いるのかわからない群れである。時には群れからはぐれるキピナゴがいるだろう。そのようなキピナゴいは、15匹から30匹いたカマスが殺到するのだろう。

キピナゴといえば、鹿児島県で偶然入った居酒屋で食べたそれはきれいだった。鹿児島では刺身醤油が甘い。多少魚の味が悪くても、このおいしい醤油に助けられて食べられそうだった。そのせいもあるのだろうが、味はほとんど覚えていない。皿に並んだキピナゴがきれいだったことばかりをはっきりと記憶している。泳ぐ姿も皿の上でもきれいであり、その両方の姿に共通するものがあるのは珍しいのではなからうか。

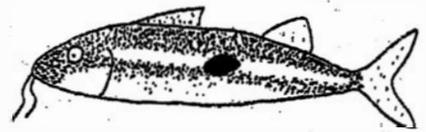
私は魚を採るのも、採ってきた魚を飼うのも好きだ。白浜に行ってから、海の中で魚を見ることを知ってそれも好きになった。しかしやはり、食べるのがいちばん好きである。キピナゴの群れと出会った時も、その美しさ、光と色のゆらめきに驚いた次の瞬間には、軽く干して焼いてもいいだろうし生姜醤油で刺身の方がいいだろうなどと考えていた。

白浜の実験所には付属の水族館がある。海から上がりノートもまとめたあとなど、時々ここに行きポケーッと水槽の中を泳ぐ魚を見ていた。ここにある食卓でなじみ深い魚の泳ぐ水槽の前に行くと、やってきた見物客がしばしば「おいしそうだな」と言っているのを聞いた。「泳いでる」とか「大きい」という声を発するのは小さな子供である。少し大きい子や大人は、そのような視覚的感想を述べることはない。「おいしそう」か「高そう」か何も言わないかである。私達にとって魚とは、目よりも口で親しむ相手であるらしい。

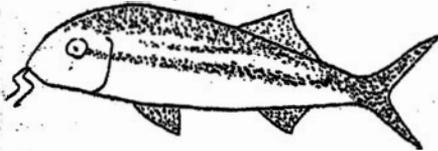
白浜の図書室の二階に、台湾の沿岸魚類図鑑がころがっていた。もしかしたら白浜で、私のいちばん親しんだ本かもしれない。この図鑑の解説には、塩焼きにして美味とか食用として有用とか利用されずと書いてあった。魚の図鑑に美味とか食用と記すのは日本だけでないかわかりほのぼのとした。それを知ってから、暇さえあればこの本を開いていた。



コメヒメシ 15~20cm
赤紫色の縦帯と尾の紋



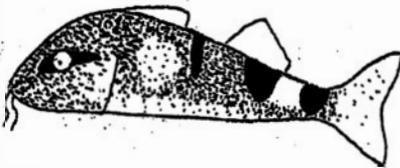
モノヤマアヒメシ 15cm
明帯の上には黒紋



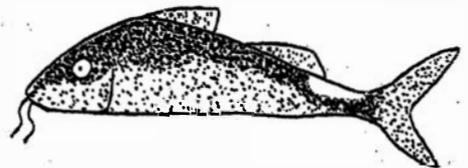
アカヒメシ 20cm
銀白の地に明縦帯



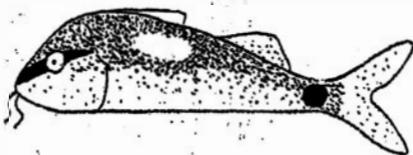
オオスジヒメシ 10~15cm
黒の縦帯と紋
背骨やや赤い



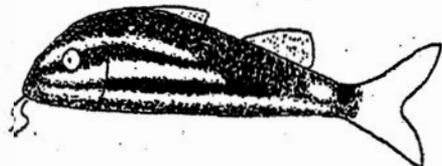
オシヤニ 5~15cm
体前半は特に変化が多い
第二背鰭下の黒横帯と
その間の明横帯は比較的
安定している



マルケチヒメシ 5~10cm
尻、白には褐色の背
尾柄の黄紋



エバニヒメシ 10cm
背の明斑、尾柄の黒斑



オキナヒメシ 5~20cm
斑紋の4つ目
ホウライヒメシと区別
が難しい

ぎっと中国のそれにも同じような解説がされているだろう。アメリカやイギリスだと、釣っておもしろいとかルアーは何がいいなどと書いてあるのだろうか。

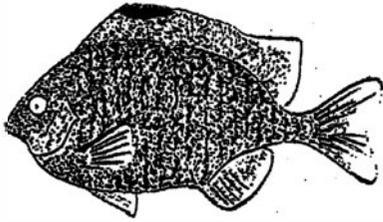
思い出すと、海で魚を見ながら食べることはばかり考えていたようだ。メジナは塩焼きか浅く昆布でしめてもおいしいだろう、カサゴなら煮つけかから揚げ。ではキリンミノは美味だろうか、派手な体色のチョウチョウウオやスズメダイの味は。しかし、食べる程肉がついているだろうか。タカノハダイは大きいけれどすこぶるまずいとのことだが、いったいのくらいまずいのか食べてみたい、トラウツボをながめながらウツボの燻製はおいしかったがトラウツボは・・・など。不謹慎極まりない。

旅行に行ってもスーパーや魚屋ばかりのぞいている。本当は市場がいいのだが、なかなかごちゃごちゃして土地の人しか行かないような市場はないし、あったとしても不案内な土地ですぐにたどりつけるものではない。しかしスーパーでも外見から思う以上に、内容は地方色豊かであって失望することはない。そのうえスーパーには、惣菜売場という大変楽しいコーナーがある。揚物はあまり変化がないようだが、煮物、和物、酢の物には変化があることが多い。そうした素材をいちいち魚売場や野菜売場に帰って確認していると、たちまち時間がすぎてしまい名所を訪れる暇などなくなってしまう。そうしたスーパーや魚屋訪問で、丹念に魚の名前を記録しておけばちょっとした魚の地方名リストができるだろうが、私はそこまで小まめではない。

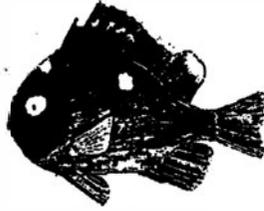
さてさて、うまい魚はなんだろう。味はその人のそれまでの生活に裏打ちされた主観によって判断される。だから万人に共通するうまいものはたぶんないだろう。私はいやしくてできているのか、嫌いな食べ物というのは今のところないし、何を食べてもおいしいと思って食べている。幸せというのかおめでたいというのか。しかし鯛がおいしいという私の意見に、けっこう多くの人があなづいてくれるのではないだろうか。新しければ刺身でも塩焼きでもいい。塩焼きならば丸ごとすればよいが、目先を変えて開いた鯛にチーズやカレー粉をまぶして油で焼いてもいい。味噌と醤油に開いた鯛をつけておけば日持ちするし、焼いても蒲焼き風になってなかなかいけます。つみれも捨て難い。頭とわたをとった鯛をさつとゆがいて酢醤油でいただくのも美味。ただしどんな食べ方でも、新しい鯛でなくてはいけない。脂がのっていた方がおいしいけれど（特に刺身はそう）、脂がのっていない小さなものもそれなりにおいしい。好き好きだろう。

秋刀魚もいい。これは塩焼き。もうもうと煙をあげて焼き、大根おろしを添える。ただしわたをはずしてはいけない。秋刀魚のわたを抜いて焼くのは、妙に上品ぶった料理屋だけで沢山である。ここのほろ苦いのがおいしいのだ。先日近所のスーパーで、秋刀魚を5本から6本買った御婦人が魚市場の人に頭を落として欲しいと頼んでいた。店の人の作業を見ていたその人が「秋刀魚のわたを抜くの？」と言った。言われた店の若い人は「頭を落とすとつい癖で」と弁解していた。主任らしきおじさんは「普通はそのまま焼く」と断言し、近くにいた婦人も加わってしばらく秋刀魚のわたをどう扱うか話がはずんでいた。結論がどうなったか知らないが、私は抜くべきではないと思う。秋刀魚に限らず魚はわたがおいしい。大きな魚だとそのままというわけにはいかないが、秋刀魚くらいだったらわたも丸ごと食べたい。とはいえ、最近の秋刀魚のわたはおいしくないとのこと、漁の仕方が変わって、たくさん秋刀魚が網の中で暴れて鱗がはずれ、そのはずれた鱗を飲んでしまうからわたといっしょに何枚もの鱗も食べることになるせいだとか。こんな内容の文をどこかで読んだことがあるが、たしかに秋刀魚の内臓、消化管の前の方にはけっこう多くの鱗が入っている。

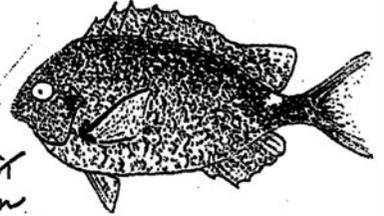
秋刀魚は塩焼きと同じくらい刺身も推薦したい。脂ののった秋刀魚のそれは、山の中をゆっくりと通ってきた湧水と同じようなあま味があっておいしい。干したものなどおいしいけれど、秋刀魚は刺身か塩焼きのような簡単な食べ方がいい。ただ、脂ののった秋刀魚は身が柔らかくてなかなかさばきにくい。そのうえに、刺身にできるような秋刀魚を入手するのが難しい。どんな秋刀魚が新鮮かは、眼と皮を見ればわかるけれど、さらに刺身になるかどうかを見わけるのは数をこなすしかないのでは。



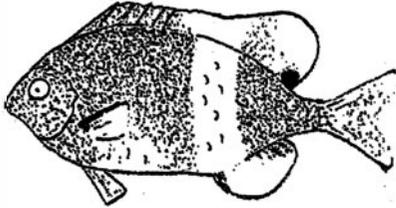
セウカズメグイ 10-15cm



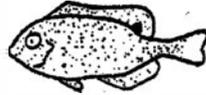
ミツホシカズメグイ 4cm



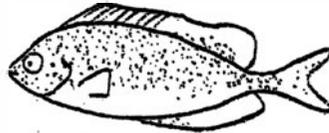
ズメグイ 5cm



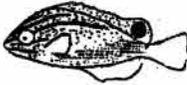
キオビズメグイ 7cm



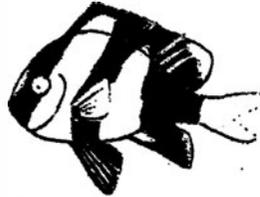
トビナズメグイ
全身青色 若魚
尾は透明 3cm



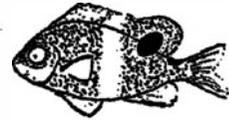
ヨラズメグイ 5cm



メカズメグイ 幼魚 3cm
赤褐色 黄褐色
— 青 ● 黒



ミズズメグイ
若魚 3cm



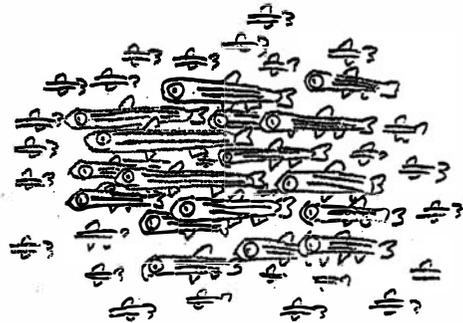
ハクセンズメグイ 4cm



オホビシゴ 3-15cm
灰褐色 黄



ロクセンズメグイ 3-15cm
灰褐色 黄



キビナゴのむし

鰹。これはハラモの塩焼き。塩をしっかりと焼くといくらでもたべられそうだが、腹鱭のまわりにはそんなにたくさんの肉はついていないので残念ながらそうはいかない。あつあつをほおばるに限る。たたきもおいしいが、大皿に敷きつめてねぎとにんにくをたっぷりとかけたものでないと味が単調すぎて飽きてしまう。血合いの味噌汁がおいしいと聞いたことがあるが、私は食べたことがありません。たぶんかなりいけると思う。

鱈もかまの塩焼きがいい。たしかに刺身もおいしいし照焼もよろしいが、鰹と同様飽きてしまうことがある。他の魚でもそうだが、腹鱭や胸鱭のつけ根、ほおの所など常に動かしている部分の肉はわたよりもおいしいかもしれない。このような所は煮ても焼いてもいいが、そのものにしっかりと味があるので塩で焼くだけがうまい。けれど鱈のかまなどは脂が強すぎて、体調の悪い時や胃腸の弱い人はおなかをこわすことがあるので御注意を。

鯛はなんといっても頭。塩焼きにしたものの頭、頭だけ炊きたいいわゆる兜煮、酒蒸し。ほおの肉、頭頂部、胸鱭のつけ根、眼のまわり。料理屋の人に「そこまで食べたら猫も食べない」とか「若いのにきれいに食べるね」と言われたことが何度もあるが、魚はバラバラにして骨までしゃぶってこそおいしいと思う。魚は骨同士があまり堅固に癒着していないので、バラバラにするのは簡単だしするべきである。手や卓上が汚れることなど気にする必要はない。鯛の頭は特にそれに値する。鯛の刺身や昆布じめもたしかにおいしいし、塩焼きも捨て難いけれども、不思議とこの魚の脂は気になることが多い。三枚におろし、皮を上にしてまな板にのせて布巾をのせ、まな板を傾けてから湯を二、三度かけてすぐに氷水にとる。こうすると適当に脂が抜けて上品になる。皮の歯ざわりがいい。鯛や鱈の脂と、鯛や秋刀魚の脂は質が異なるのだろうか。

鮫鱈や真鯛は鍋。肉も皮も胃袋も鰹も鱈も食べられる。あのように目が離れ口が大きく、つぶれた顔をした魚がどうしてこれ程上品なのか不思議である。味噌で味をつけるのもよいが、水たきにしてもみじおろしを添えてほん酢で食べるのがいい。あっさりとしずに限る。鮫鱈なら胸鱭か胃袋、鯛ならば白子が好きだ。

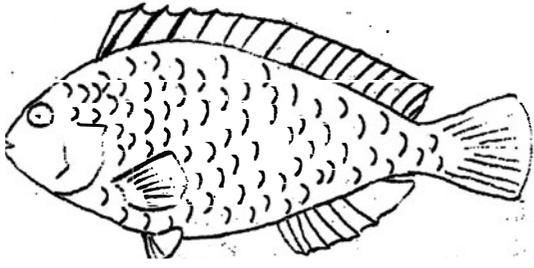
たいして魚を食べているわけではない。それでもそれなりに食べてきている。めぐまれているのかただいやしいだけなのかわからないが、今まで食べた魚のほとんど全てがおいしかった。どんな食べ方がいいか。様々な食べ方があるけれど、刺身や昆布、酢でしめるなど火を通さないのが好きである。しかし新しければ新しい程塩焼きがいいように思うがどうだろう。

きれいに網で焼くのは意外と難しい。最初に網をよく焼いておくこと。魚をのせたら、こまめに網を動かして焼きむらができないようにすること。魚にさわるのは、ひっくりかえす時の一度だけにする。表六分に裏四分のつもりで。とにかく精進あるのみ。鯛一匹をきれいに焼けるようになれば自信を持っていいと思う。きれいに焼けた鯛には酢だちを添えて。

最近まで炭火で焼くとうまいというのは、わかったような口をきく人のでまかせだと思っていた。しかし本当に炭で焼いた魚はおいしかった。先日知人の所で、七輪を使って鮎を焼いたのだがガスよりもずっとおいしかった。こげがおいしかったし、身もふっくらとしていたのだ。どこがどう違うかわからないし、焼いた魚を出されてガスか炭かあてなさいと言われてもあたらないだろう。しかし炭火の方がおいしいと信じるようになった。あれ以後家で焼き魚をほとんどしていない。家ではガスで焼くしかないから。

煮つけもいいが、なかなか難しい。煮汁をたくさん使うやり方、少ししか使わないやり方、味つけも醤油だけのやり方から砂糖や酒も入れるやり方。上手にできないけれど、やはり新鮮な魚を使うことがこつだろうか。蒸し物も好きだが作ったことはない。むしろ煮つけよりも簡単だと思う。そのうち身につけたい料理方法。

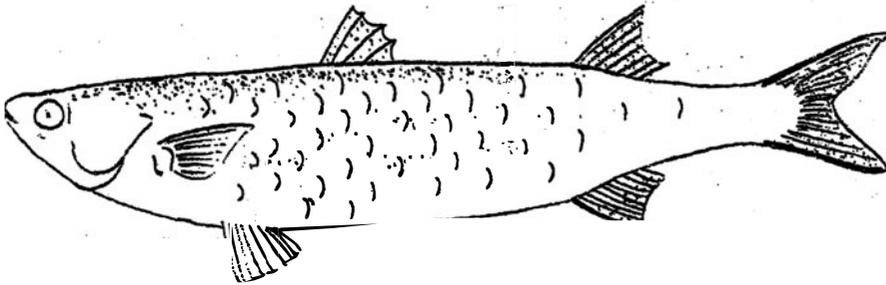
まだまだ出会ってみたい魚は多い。海に入って実際に泳いでいる所を見てみたい魚、市場で買って食べてみたい魚、自分で採ってきて飼ってみたい魚。つかず離れずで、ずっと魚とはつきあっていきたいと思う。



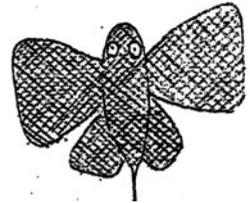
マツガイ
5~30cm



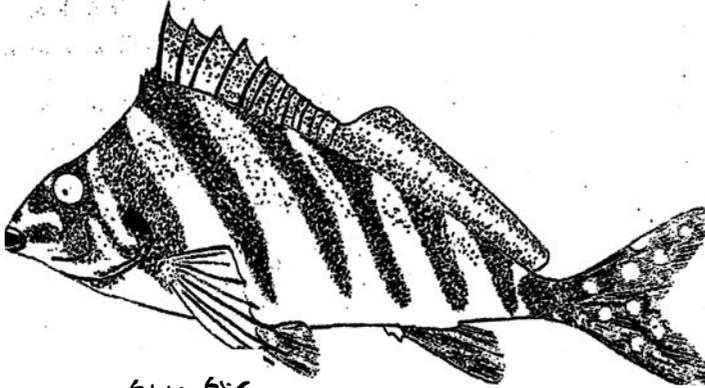
マツガイ鰻魚
6cm



ボウ 30~50cm



トビウオ鰻魚
2cm



クハハガイ.
10~30cm
白色に黄褐色の横帯

はじめでおわりのご挨拶

岡田 侑子

私が会員になりましたのは平成5年の秋頃だったかと思います。同じ教室の澤田さつきさんから「おもしろい読み物があるよ。おもしろい先生がいるよ」という感じで生物学会誌を渡されたのです。そしてそのあまりの面白さに借りて読むだけではおさまらず、会員にさせて頂いたのです。奥野先生とは何の面識もなかったのですが、すぐにバックナンバーが「どん！」と送られてきたのには驚きました。

『金沢城のヒキガエル』をお送り頂いた時、てんとう虫の切手が貼られておりました。わざと生物をデザインした切手で統一されたのですか？ 生き物に対する愛着といいますか、こだわりを感じました。

おもしろい読み物がたまあーにポストに入っている、というのは人生の“一つの幸せ”だと思うのですが、それがなくなってしまうのでしょうか？ また何かおもしろいことがありましたら、是非是非着払いで送りつけてください。お願いいたします。

7局長：会長、『金沢城のヒキガエル』、ほんとうに「てんとう虫」の切手でみんなに送りつけたんですか？

会長：おれやないよ。どうぶつ社が送ったのや。

7局長：そうでしょうね。「カエル」を「てんとう虫」で送るなんて、ちょっと皮肉がきつすぎますよね。

会長：どうぶつ社にはうちの卒業生の加納明世君というのがいてなあ。彼女は生き物好きやから、そんな切手、選んだのやろう。

7局長：その人、中村教授がてんとう虫やってること、知らなかったんでしょうね。

会長：いや、知ってたはずだよ。彼女が大学院に入った頃に、中村君は来たのやから。

7局長：じゃ、きつと、彼女の皮肉ですね。《皮肉じゃないっ！ たまたま切手があったからよ＝加納》

自然環境保全という名の自然破壊

長井幸雄

近年、「自然環境の保全」や「環境に配慮した開発」という名のもとで、多くの公共事業や開発事業がなされている。例えば、自然の流れを三面コンクリート張りの排水路にして水を効率よく海に流し出すよう整備したために水生の動植物が激減した。そして、これらの水路に多自然型工法で再び自然を呼び戻そうとする事業がある。また、森林を伐採した跡地に緑を取り戻すための各種の緑化推進事業がある。さらには、市民が自然に親しむためと称する健康とゆとりの森林整備事業がある。

多自然型工法では、自然に近い環境を作り出すために、その地域には生息していない動物や自生していない植物を導入したり、その地域には存在しない種類の岩石を配置したりすることによって自然を呼び戻すという無駄な努力が多く見受けられる。また、緑化推進の事業や健康とゆとりの森整備事業においては、その地に自生しない樹木を植林したり、その地に自生していた立派な樹木をわざわざ伐採して、そこに自生していた木と同一種の樹木を再び植栽したりしている。

これらの行為によって作り出された環境はなるほど元の自然に近付いたとはいえ、似て非なるものである。なぜなら地域の自然にはその土地に固有の変異があったはずだからである。自然の環境を呼び戻すという理由で、その土地に自生しない植物を植えたり、同一種の植物とはいいなながら他の地域に成育していた異なる遺伝子の組合せを持つ植物を導入したりすることにより、自生種との間に交雑が進み、その地域の遺伝子組成が変化する。これは自然の破壊を意味しており、決して自然環境を保全したことにならず、自然を取り戻したことにもならない。

このようなことは植物に限らず動物でもおこなわれている。イワナの激減した河川に別の地域に生息していたイワナを放流することや、帰化動物のブルーギル、ブラックバス、カダヤシなどを放流することによって自然環境が改善されたとしている事例である。このような行為が今後も継続されれば、日本各地の固有の生物相が確実に喪失することになる。地域の自然を取り戻すためには、その土地に生活する動植物を導入することが自然を取り戻す最良の方法ではないだろうか。この方法を実践するに当たっては、必要最小限の手を加えること以外には何もしないことが、自然環境を最も有効に保全することになるという事実に早く気付くべきではないだろうか。

残念!! 「日本生物学会誌」

中山 美香子

(女房が入院中のため夫が勝手に代筆しました)

結婚してから女房の荷物に「日本生物学会誌」のバックナンバーがありました。昨年は『金沢城のヒキガエル』とか言う変な題名の本を送って来たり、年会費が100円だとか聞いていたので随分とおかしな会だなあと感じていました。

それが今年、『金沢城～』が利用者から要望がでたり、書評がアチコチに見受けられるようになったりと(私、公共図書館で働いています)薦められてしまいました。

『金沢城の～』は図書館でも購入させて戴きました。利用回数は半年で6回ぐらいでした。自然科学系でこの利用回数はなかなかのものです。ちなみに『生態学入門』『さかな陸に上る』も所蔵しておりましたので読ませてもらいました。「日本生物学会誌」の編集局だよりも読みました。いや～、面白いのなんのって早速、「生物学会誌」のバックナンバーを注文しました。(引越しの時に不要な本や変な雑誌の大半を捨てていたのです・・・)

本と雑誌を読み進んでゆくととても懐かしい気持ちになりました。私の学生時代のゼミナール担当先生(社会心理学・昭和一ケタ生まれ)と印象が重なるのです。

思い出すに、その先生はよく「権威には『なんで? どうして?』と臆せず質問してやれ」だの「ある人が強硬に主張するその逆のことを想像すればその人が分かる」等々です。その時は随分ヒネタことを言う先生だなあ、思春期に敗戦を迎えたせいなのかなあと感じていましたが、自分が先生の年になって来ると初めてその意味する所が分かるようになりました。

いや、決して奥野先生がヒネテいると言うつもりはありません。ただイメージが少々ダブルだけです。

そういえば私の先生は大学紛争の折、大学職員の間人模様の研究対象にし本を出版したので職員の中では仲間外れにされていたらしい。

その先生からは学問には反骨精神と勇気と根性と根気が大切だと教わりました。生半可な気持ちでは駄目なんですね。

奥野先生の記事からはそんな精神がアリアリと感じられます。

「日本生物学会誌」を読んでいるとまた学生時代の講義を受けているようでした。先生の記事が読めなくなるのは淋しいですね。新しい著作はそうは頻繁にはでないでしょうし、停年退職だと紀要にも載らないだろうし、助教授って名誉教授になって勤続できないのですか?

そうそう先生はワープロを使われるようですので、パソコン通信はいかがでしょう? あの筒井康隆も断筆宣言後行っています。印刷物でなくフロッピーディスク配布なら印刷製本の手間が無く簡単では? まあ、原稿作りが一番たいへんなのでしょね・・・。

イヤ～、まっこと残念です。またいつか先生の講義を受けられることを願ひまして、サヨウナラ「日本生物学会誌」!

なんにも目的はないけれど、「日本生物学会誌・最終号」の原稿を書こうと思う。会長から「全会員が何か書くように」と命令が発せられ、もし原稿を書かないと、どこからともなく本人の知らないうちに原稿が現れ、最終号に載ってしまうそう。しいていえば、それが原稿を書く動機である。(さて、この原稿は本人が書いたのでしょうか。それともどこからともなく現れたのでしょうか。)

唐突ですが、あなたは占星学を信じますか。また、個人の現在・過去・未来が正確に書かれた予言書の存在を信じますか。答えは、ノーに決まっていますよね。私だってそんなもの、信じちゃいませんでした。2年ほど前、ある本を読むまでは。その本とは、『理性のゆらぎ』(青山圭秀著、三五館)と、その続編にあたる『アガ스티アの葉』(同)です。事実は小説より奇妙キテレツ。読み終わる頃には、すっかり洗脳状態でした。

どちらの著書にも登場するサティア・サイババは、インドの聖者。自ら神の化身と名乗り、さまざまな奇跡を起こす。『理性のゆらぎ』で、著者はこのサイババと出会い、インドに伝わる英知「ヴェーダ」と出会い、インド占星学と出会う。また、『アガ스티アの葉』では、5千年ほど前のインドの聖者アガスティアが、シヴァ神からの啓示により書き残したという予言書を、著者が読みに行き、その驚くべき内容に驚く。

サイババが説くのは「ヴェーダ」の教えと同じ(サイババが神の化身で、「ヴェーダ」が神の教えなら当然)。すべての存在は一つである。唯一無二の存在が何かを意志したとき、多様化し、自身が一つであることをなぜか「忘れた」。この世の営みは、そのことを思い出すまでの過程であり、これは、神の戯れであるという。この世界には始まりも終わりもなく、その繰り返しは永遠である。よーするに、進化のゴールは、「神」との合一とゆーことらしい。

近代西洋科学は、粗雑で表面的なレベルである物質を対象とするため、理解しやすいが移ろいやすく、その法則はしばしば覆る。これに対し、東洋伝承科学は存在の深いレベルを対象とするため、表層しか見えない人には全く理解できない。輪廻転生やカルマの法則(過去の行為が未来の自身に返る)は、深いレベルに達した者にしかわからない。占星学はこれらの法則に基づき、読み解かれる。

アガスティアの予言(アガスティア・ナディ)は、指紋により検索される。男なら右手、女なら左手の親指の指紋をもとに、ナディ・リーダーと呼ばれる訓練を受けた正当な家系の者が探し出す。予言は、ヤシの葉に古代タミル語で書かれている。全部で16章に分かれていて、そのうち最初の12章は、占星学の12の部屋に対応する。第1章には、本人の名前・生年月日、親の名前、読みに来る時期などが、まず書かれている。また、ホロスコープ(誕生時の星の配置を示す天宮図)も書かれているが、ホロスコープは、生まれた正確な時刻・位置がわからないと書けないものである。過去世や未来はともかく、今生の過去・現在についての記述は極めて正確で、その時点では本人も知らず、あとで確認される事実も含まれている。サイババは、自分の起こす奇跡(物質化現象、病気治癒等)について「名刺」代わりだという。あとになれば、奇跡を起こせるかどうかは、たいした問題ではなくなるが、やはり最初は、それがないとサイババに興味を覚えたかどうかあやしい。これは、アガスティアの予言にもいえることかもしれない、こんなすごいことがあるとすれば、サイババや、「ヴェーダ」の教えるところは、がぜん真実味をおびてくるように思える。

最終的には、信じられるか信じられないかである。私も、もちろん占星術なら何でも信じているわけではなく、おおかたはインチキだと思っている。ただ、本物の占星術師は、星の配置からかなりの精度で運命を読みとれるのだろうという気がしている。

すべてが一つであるとすれば、わたしはあなたやその他もろもろと深いレベルでは同一の存在であり、そうなると、この原稿は本人が書いたものとも、他の誰かが書いたものとも言えるのかもしれない。

世紀末への鎮魂歌

相生啓子

この原稿は今年の7月5日より8月7日まで、某商業新聞の科学面のコラム「海のゆりかご・藻場」に連載されたものの元の原稿です。紙上では、写真もいれたりしたので文字数に制約があり、表現も平易なものとなりました。この原稿も540字以内に収めたものです。このコラムは、地球上の生きとし生けるものへの、勿論自分へのレクイエムのつもりで書きました。詩を書くほどの風流は持ち合わせておりませんので、普通の文章で書きましたがご笑読頂ければ幸いです。

(1) 海への里帰り

鯨もジュゴンも海に里帰りした動物である。植物では海草（うみくさ）のアマモが里帰り組の代表選手である。アマモ群落は波静かな湾の奥の水深3メートルぐらいの海底に形成される。その生息域は人間にとっても、干拓や埋め立て、港の岸壁として利用し易いところであったため、都市の内湾ではアマモ群落はほとんど消滅してしまった。したがってアマモを見たことも聞いたこともないという人が多い。自然海岸が残っている内湾の砂浜で、たまにススキの葉のようなアマモの葉が打ち上げられているのを見かける。アマモのルーツは淡水の水草の仲間の先祖がそうであろうと考えられている。日本で発見された化石でショウフイシとかオモトイシと呼ばれる化石がある。これはコダイアマモとも呼ばれている。コダイアマモの先祖が淡水の水草と海草に分かれたという学説がある。しかしこの化石は動物が這った痕跡であるという説もあり、コダイアマモの形が陸上植物に似ているため、陸上植物か淡水の水草が流されて堆積したものの痕跡という説もある。熱帯ではジュゴン（海牛）が熱帯種の花を食べて生きている。大昔この海への里帰り組どうしが、暖かい海と一緒にすんでいて、ジュゴンの祖先に食べられていたところの花の祖先はどんな形をしていたのであろうか？

(2) 海のゆりかご

海にも森や草原がある。岩礁の低潮線から漸深帯にホンダワラやカジメの海中林があり、内湾の波静かな砂地にはアマモの草原がある。ホンダワラやカジメもワカメやコンブと同じく海藻で岩にからだを固定させ、からだ全体で養分を吸収して生きている。花も咲かず実（種子）もつからないが、胞子で子孫をふやす。海藻のうち緑藻の仲間が上陸し根、莖、葉を持ち花を咲かせ種をつくるようになった種子植物のあるものが海中に戻り草原をつくるようになった。これが海草（うみくさ）である。海藻の森も海草の草原も藻場と呼ばれる。この海藻の茂みや砂地に広がるアマモの草原は、陸上の森や草原と同様に、小動物たちにとっては格好の生息場となっている。貝、エビ、カニの仲間は勿論、あまり知られていないコケムシやゴカイなどが葉上を棲みかとしている。それぞれに縄張りをもったり、卵を産みつけたり、その卵がかえって稚魚となり葉上の付着藻類を食べたり、他の小動物を餌にして育つ。藻場では生命が生まれ、また沖あいかからやってくる魚が藻場にすむ動物を餌として利用し、また沖へ回遊して行くといった数々のドラマが展開される。藻場では枯れた葉が微生物によって分解され、海水中の栄養塩に帰して行く。藻場生態系は物質循環が完結できる機能をもっている。

(3) なりその花とワレカラ

陸上が春になる少し前から、海中では秋が始まる。岩礁の海藻、ホンダワラの仲間は褐藻で5月頃にはアオリイカの卵塊が産みつけられていたり、沢山の名も知らぬ小魚の群れ

がホンダワラの林にやってくる。少し寒いがフィッシュウオッチングができる季節でもある。ガラム場（ホンダワラの林）には魚たちの餌となる動物がいる。良く観察するとホンダワラの葉とそっくりな色をしたワレカラ（甲殻類）がしがみついている。大きさは1から3センチぐらいでナナフシ虫にカマキリの鎌を持たせたような格好をしている。ワレカラはフクロエビ類で、雌は体の腹側に大きな保育嚢（袋）を持っている。親の育房から這い出した子供たちは直ぐにどこかに散っていなくなるが、なかには子供たちが数日間母親の細い体にしがみついて成長する種類もいる。母親はその間外敵から子供を守っている。「なのりその花」と万葉集に詠われたホンダワラの花は早春に咲く。花は生殖器床の卵でやがて受精し胚となる。卵の放出は数回繰り返されるが、卵を放出しきって役目を終えたホンダワラは、枯れて流れ藻となる。ホンダワラが枯れると、ワレカラはホンダワラの根もとの方に移動してくる。かれらの多くは、行方も知れない流れ藻と共に流れ者になるのは、まっぴらごめんと思っているのかも知れない。

（4）アマモの呼び名

海草（うみくさ）のアマモは、太平洋、大西洋の北半球の沿岸で見られる世界共通種である。日本では、岩手県の沿岸で「ゴモ」と呼んでいる。しかし「ゴモ」は、このあたりに分布しているスガモ、スグアマモ、タチアマモを全部含めてどの海草も「ゴモ」と呼んでいる。瀬戸内海では、「モシオグサ」と呼んでいる。赤穂の塩田を連想させられる呼び名である。瀬戸内では干して燃料として利用したり肥料としても利用したという。瀬戸内海の漁師たちは、アマモの藻場を大切にしてきた。小魚の生息場であり大型魚類の餌場として重要な役割を果たしている生態系であることを知っていたからである。ところが高度経済成長と共に、海岸線の相次ぐ埋立がおこなわれ藻場が消失していった。赤潮の発生や海洋汚染も藻場の消滅に拍車をかけた。岡山県の日生町の漁協では、アマモ場を再生させようと種を蒔いたり、水産試験場の試験研究に協力して藻場造成実験を続けている。再び大量の「モシオグサ」が打ち上げられるようになることを願う。アマモも呼び名で一番長いのが「リュウグウノオトヒメノモトユイノキリハズシ」である。丹後の国の漁師、浦島太郎の伝説と関係がありそうである。乙姫さまの衣装は朝鮮半島のものとも言われるから、やはり日本海側の呼び名であろう。

（5）海藻おしは

紅藻は深いところにいるものほど鮮やかな赤い色をしている。海藻がカラフルなのは光の届きにくい水中で効率良く光合成を行うために、緑色の葉緑素だけでなく他のさまざまな色素を持っているからであるという。水の中では赤い光がいち早く吸収されて緑色になってしまう。この緑色の光を良く吸収するのが赤い色素であるため、深いところの海藻ほど赤い色素を多く含んでいる。しかし私たちの眼にはきれいな赤い海藻は海中では黒ずんで見える。紅藻類は赤、青、黄、緑の4種類の色素を持っている。浅いところに生えるアサクサノリの仲間も、これらの色素を高い濃度で含んでいるため黒っぽい色をしている。私が本格的に海藻おしはの作り方を習ったのは最近のことである。ボランティア活動で海中自然観察と海藻おしは教室を手伝うことになったため、一般社会人の人達と共に、静岡県の下田にある筑波大学臨海実験センターでの研修会に参加した。海洋研究所にいても自分の専門分野は狭いものである。お陰で随分と視野が広がった。海藻おしはのなかでも赤い色の紅藻は大変美しい。タマイタダキ、ユカリ、トサカノリ、イソハギといった名前は忘れることはないだろう。なかにはカラフルな海藻を組み合わせたアート作品を創作している人もいる。

（6）海浜のゴミ

南伊豆・奥石廊の中木は、70戸ほどが民宿経営と海老網漁などの漁業で生計をたてている美しい海の里である。名字が同じ家が多いため、どの家も屋号を持っている。1974年の

伊豆半島沖地震で正面の山が崩れ30数名の命が奪われた。その後埠頭の前に何棟かの鉄筋三階建の集合住宅が建てられた。生活改善センターには人足表が張られていて、草刈りや海水浴場の清掃などの共同作業が義務づけられている。まだコミュニティの機能が残っている。しかし近代化の波はここにも容赦なく押し寄せてきている。高齢化と後継ぎがいないため、この素朴な里もジレンマに立たされている。やがて、どこにでもある海辺の観光地にさまざまってしまうのだろうか？ そして豊かな海の幸と素朴な人情は消え失せるにちがいない。毎年春と秋に、中木の協力で開催している海中自然観察研修会では、最終日にヒリド浜のゴミを集めて分別し記録している。多くは観光客が置いていった空きカン、ビン、プラスチック類である。秋には春の倍以上ものゴミが集まる。オーストラリアのパーズ市郊外の公園では、家族連れがバーベキューを楽しむ光景が見られるが、ゴミは全然見当たらない。持ち帰るというマナーが徹底している。根本に自然を大切にするという倫理が確立されているからであろう。

(7) ロットネスト島

西オーストラリアのフリーマントルから西へ18キロほどの沖にアメーバのような形をしたロットネスト島がある。大陸と陸続きだったがおよそ六千五百年前に海面の上昇により切り離された。島の北東部には塩湖がある。東西20キロほどの島に1500種類の種子植物が分布していた。1696年に初めて人間が足を踏み入れて以来200年間で150種に減ってしまった。多くの西オーストラリア特有の植物が絶滅してしまった。現在は州政府による管理のもとに保護されている。クオッカという兎とカンガルーの合の子のような有袋類が野性のままで生きられるよう配慮されている。人間が入り木を切って生活圏を広げ森林が減ってしまった。クオッカは餌が無くなり一時は激減したようだ。現在植林もされてはいるが、雨量が少ないためクオッカが増えると森が減少するという不安定な生態系である。まわりの海はどこも水深5メートルぐらまでは海草(うみくさ)の藻場である。温帯海草7種と熱帯海草2種がこの島の周囲で見られる。保護されているはずの海草藻場もヨットの錨でかき乱されている。広大なオーストラリアの自然は広すぎて見て廻るのが大変だが、ここでは箱庭的な生態系が見られる。研究と教育とリゾートを共存させようとしている実験区のようなところである。

(8) 下水道

小田和湾には、神奈川県で唯一まとまったアマモ群落が見られる。光合成をおこなって自分の体を作る植物にとっては光が一番重要である。汚染による海の濁りは、海草や海藻にとって致命的である。伊豆半島では20メートルの深さまでみられるカジメが、三浦半島では10メートルより浅いところしか見られない。アマモの生息も4メートルぐらいが限界である。ここ小田和湾には、現在横須賀市西部地区の下水を集めて処理するための下水処理施設が建設されつつある。建設中の建物の外壁に「アマモ回復作戦：稚魚成育の宝庫、小田和湾を蘇らせる下水道」と書かれていた。完成後には、小田和湾の生物がこれまで体験したこともない大量の下水道の処理水が流れ出てくることになる。アマモが回復することを、実験的に実証したうえでアマモ回復作戦なのだろうか。フランスのニース市の下水処理施設は郊外のアンティープというところにある。景観が重要視されているためと厳しい規制により、構造物は目立たぬように地下に建てられている。門構えは厳重であるが庭の樹木の下に地下が処理施設である。処理された水は周辺海域のポシドニアという海草や動物、魚類への影響を最小限にするよう配慮されていて、排水口の周辺に異変がないかどうかカメラで監視している。

(9) アカウミガメ

静岡県御前崎の砂浜には天然記念物に指定されているアカウミガメが産卵にやってくる。卵は御前崎町の保護指導員が砂浜を巡回して、ふ化場へもっていき、2カ月後ぐらい

に卵からふ化した子ガメを海へ放すという作業を続けている。昔は浜の上の方の芋畑やコウボウムギなどの海浜植物のあるところに穴を掘って産卵した。しかし、砂浜を分断しているコンクリート壁と、防潮堤に囲まれた砂浜は狭くなり産卵場としては適さなくなってしまう。上陸したカメは防潮堤の手前で迷走し、台風の高潮をかぶってしまうような低いところで産卵してしまう。ふ化する前に卵が死んでしまうのでふ化場でふ化させなければならない。人間の手助けがないと御前崎のアカウミガメは存続できないのである。アカウミガメの甲羅には、フジツボやエボシガイや藻類がついている。この藻類の中にはウミガメドロノミとかワレカラとかタナイスなどの動物が住んでいる。2億年前から生き続けてきたアカウミガメと、甲羅の生物の共生関係については、筑波大学の青木優和さんが研究を進めている。環境保全という意味からも海浜植物を再生させ、天然記念物としてだけでなく砂浜の生態系の一員として、アカウミガメが自然状態で繁殖できるような環境を整える対策を考えるべきではないだろうか。

(10) オオアマモ

アイカップ岬にある北海道大学理学部厚岸臨海実験所の裏の斜面には大きな葉のフキの群生、白い花を咲かせるオオバナノエンレイソウの群生が見られる。厚岸湾にはここでしか見られないオオアマモも群落がある。アマモより大型の海草(うみくさ)である。海鳥もオオセグロカモメがいる。本州のツキノワグマ、北海道のヒグマ、北極のシロクマの例で有名なベルクマンの法則がある。類縁の動物の体のサイズが北方種ほど大きくなる。寒い気候のもとで熱の放散を防ぐための適応であると説明されている。オオアマモは多年草で秋冬は栄養株が成長し続けている。夏でも海水の温度は15度ぐらいにしかならない。定温のもとで成長するのに時間がかかるため大型になるとも考えられる。オオアマモの花穂の数はアマモに比べはるかに少ない。したがって花株あたりの種の数も少ない。厚岸の海浜には数メートルにたつコンブが打ち上げられる。コンブ類は夏に急激に成長する。これも冷水域への適応かも知れない。陸上植物が春に急激に成長するのは、雪と氷に閉ざされてしまう冬に備え、暖かい春から秋の短期間にできるだけ多量の有機物をつくり種を残すために大型になるのかもしれない。このような寒冷地の植物の反応、特に水生植物についての研究はこれからである。

(11) 磯焼け

北海道で採れる昆布が最近減ってきている。その理由は温暖化らしい。流氷がやってこなくなったためコンブが採れなくなったという。以前は岩礁に接岸した流氷が岩の表面をこすって他の藻類を掃除してくれたので、沢山のコンブの胞子が着床することができ沢山のコンブが育つことができたからだという。南伊豆、石廊崎のイワノリでも似たような話がある。西風が吹き始める11月の終りごろ漁師さんたちは岩を掃除する。その岩を強い波が洗ってくれる。他の藻類が着いていないきれいな岩に胞子が着床しやすい。西風が強ければ強いほどイワノリが育つのだ。西高東低の冬型の気圧配置が重要なのだ。温暖化の原因は石油燃料の消費により大気中の二酸化炭素の量が増えたためである。4億年前に上陸した植物が野山を覆うようになって酸素が増え人類も生きて行けるようになった。陸上に生物が住める地球環境が形成されたのは、4億年前より以前の海中の植物が光合成することによりオゾン層ができたからだ。その海の植物の子孫にあたるコンブが減り、東北地方では磯焼けでその他の海藻も見られなくなった。磯焼けの原因の解明は難しい。陸上ばかりでなく、海でも想像以上に砂漠化が進行しているようだ。どうやら地球の歴史の歯車が逆回りし始めたらしい。

(12) ウミシヨウブ

八重山の西表島の崎山湾には、熱帯の海草(うみくさ)、ウミシヨウブの大群落が広がっている。ウミシヨウブは雌雄異株で6月から8月の大潮の時に開花し海面で受粉する。

2ミリぐらいの発泡スチロールの粒のような無数の雄花が海面で開花した雌花の周囲に集まり雌花のヒタのような溝に引き寄せられていく。上げ潮になると雌花の花弁が雄花を包みこむように閉じていく。受粉した雌花の茎は受話器のコイルのようにねじれて根元からみつくように固定される。果実のなかの種子が熟すまで波浪でもぎとられないようにしている。一つの果実に8から10個の種子が入っている。種子は薄緑でマカダミアナッツぐらいの大きさであるから、種子が海流に流されて分布を広げる役割をするとは考えにくい。栄養株の葉は枯れると固い繊維が根元に残りブラシのようになっている。水槽に隔離しておいたウミシヨウブが、野外のものと同じリズムで開花していたという記録がある。夏の間の大潮ごとに開花することが遺伝的に記憶されているのだろう。水面で受粉することと種子が大きいことは、ウミシヨウブが陸上から海中生活に入った歴史がまだ浅い証拠であろう。花の茎がコイル上にねじれる適応は、淡水の水草セキシヨウモでも見られる。

(13) 埋め立て

今全国各地の海岸で「海との共生をもとめて」というキャッチフレーズのもとに、海洋環境作りが進められている。既存の干潟や砂浜や藻場を埋め立てて再生させるという改造計画である。このような計画は、河川改修の際の近自然工法あるいは多自然型川作りの流行がきっかけであろう。自然と人間との共生を図るために、「生物の良好な成育環境に配慮する」ということをうたい文句に行われている。しかし、このような工事が生物種の保全に役だっている例はまず無い。海浜の再生と称して、海水浴場を整備するために移植された海草（うみくさ）のヒルムシロが全部消滅してしまった例もある。東京湾のような自然治癒力の弱まったところの干潟は、最後に生き残った細胞である。最後の細胞をとことん生かす方法を追及すべきである。既存の干潟や藻場を潰してしまったために今までそこに暮らしていた動物や植物たちが姿を消し、そこには環境の攪乱に適応した生物だけがすむようになる。川、干潟、砂浜、藻場は連続した生態系である。ヘドロが溜まる理由、アマモが消滅した理由を取り除かないかぎり海の更生はできない。「活力ある海の再生のための埋め立て」とはいつても、これは究極の自然破壊であり、悠久の時を経てつくられた日本の自然と風土にとどめを刺す行為である。

(14) 原点

初めて海外学術調査に参加したのは、13年前パプア・ニューギニアの藻場の調査であった。首都ポート・モレスビーに近いモトボア島で一カ月半ほど調査が続けられた。パプア・ニューギニア大学の臨海実験施設といっても雨雲をしのげる程度の鳥小屋のような実験棟と宿泊施設があるだけだった。目の前にある海草（うみくさ）の藻場は7種類の熱帯海草が混ざりあった藻場で、藻場にはマガキガイ、シュモクガキ、ナマコ、シラヒグウニ、ガザミなどの底生動物がたくさん住んでいた。実験で疲れた時は、海に入ってガザミにとらみあったり、スズメダイを観察したりするのが唯一の楽しみであった。藻場の生物はどのような多様性を持っているのか、どのように共存しているのか様々な情報を提供してくれた。実験のために発電機は持ち込んだが、基本的には、タンクに溜められた雨水を使用し、明りはろうそくか懐中電灯しかないというシンプルな生活である。近くの部落の住民の生活の糧は漁業である。早朝網をひいて捕れた魚を市場で売る。必要以上に魚を捕るようなことはしない。衣服もつけずに無邪気に海辺で遊んでいた子供たちの姿は忘れられない。今は随分変わってしまったことだろう。パプア・ニューギニアは「原点に戻る」ことの重要性を教えてくれた。

(15) 研究エゴ

南伊豆の奥石廊崎では駿河湾独特の海底地形のためか、時折珍しい生物に出くわすことがある。今年も5月松に南伊豆海洋生物研究会主催の海中自然観察研修会が行われた。外海に面した岩礁のホンダワラの藻場の近くで、誰かが深海魚であるフリソデウオの幼魚を

発見した。透明な背ビレを波打たせ華麗な振袖のような胸ビレをたよりなげに揺らせて泳いでいた。研究者は当然のごとく、皆に見せるためと標本用にと捕まえてポリ瓶に入れてしまった。研究生からは、「研究者のゴゴだ、逃がせるべきだった」と批判の声があがった。このような批判を浴びせられた研究者は、否応なしに種多様性保全とか生態系保全という問題を考えさせられることになる。海洋の生物の場合これまで知られていない生物が見つかる事が多い。私がおもしろい海草（うみくさ）を見つけた場合、どうするであろうか。日本ではレッドデータブックに 895種（17%）の植物が絶滅危惧種として記録されている。水生植物のなかには、ごく普通に見られたものが絶滅に瀕しているものがある。箱庭的な日本列島の生態系では、希少種であれ普通種であれ人間活動の影響下にさらされているのである。生物多様性の保全の問題は人類の生存に関わる重要な問題だ。

(16) 花粉

今年は春の海水温が低かったせいか季節が約一カ月遅れている。岩手地方では6月になって海水温が15度となりアマモが開花した。水生植物が受粉する場合、陸上植物と同じように、風や昆虫に花粉を運んでもらうもの、水面で受粉するもの、水中で受粉するものと色々な受粉のやり方がある。アマモのなかまは、水中で受粉するときに、最も確率が高いやりかたで受粉するために花粉の形は糸状をしている。水槽に移植したスゲアマモの雄花が何かの刺激で裂けて、ソロソロと流れ出すところを観察することができた。この糸状の花粉は穂から2本のアンテナのような柱頭を出した雌花に到達し、絡みつくようにして受粉が終了する。この糸状の花粉を発見したのは、ナボリの植物学者カヴォリニである。200年以上も前の1787年のことである。軍事研究では、このアマモも糸状の花粉にヒントを得て最も確率良く当たる機雷が開発された。水中でランダムに散っていく物体が目標に当たるには、球形や楕円形よりも棒形が一番良く当たることをコンピューターで証明したのである。軍事研究はもっぱら破壊行為のために機雷を進化させたが、生物は次世代を生産するために糸状の花粉を進化させた。ここにも人類と生物の相反する皮肉な行動がある。人類の目的はいったい何であろうか。

(17) 帰化生物

人の媒介などによって運ばれ移入した新たな地域で野性化した生物のことを帰化生物という。鉄道の線路ぎわで良く見かけるセイタカアワダチソウは誰でも知っている帰化植物だ。海の生物が運ばれる方法には、木材の中に住み込んだ甲殻類、養殖ガキの殻について運ばれる海藻の胞子や海草の種子など、そしてプラスチック水がある。ウイルスによって起こる海洋生物の病気の多くはプラスチックによって運ばれると言われている。日本原産の二枚貝のホトトギスが、アメリカの西海岸のサンディエゴのアマモ場に大繁殖し、場所によっては1平方メートルあたり20万個体もの密度であるという。こんなに増えると当然アマモの成長が阻害されアマモが消滅するという問題が起きている。幼生がプラスチック水と一緒に運ばれて繁殖したといわれている。日本から運ばれた海草（うみくさ）では、干潟に群落をつくるコアマモの例がある。養殖のためのカキ殻に種がついて運ばれて来たアメリカの沿岸に広がった。生命力の強い移入種が増えると、もともと住んでいた種類が住めなくなってその生態系全体を変革させてしまうので問題になる。日本では蚊の天敵として移入されたカタヤシが増え、自然界では在来種のメダカが住めなくなってしまった例がある。

(18) 草の根

海草（うみくさ）は、多年性の種子植物である。アマモは秋から冬の期間は、長いウナギのような形の葉を数枚もった栄養株が草原を形成している。栄養的に繁殖したものであるから根っこはつながっている。春から夏にかけて花をつけた株が生長して米粒ぐらいの種が熟すと枯れてしまう。根もとから切れて流れ出す株もある。穂のなかに包まれていた種子は、どこか遠くの内湾の海底にたどりついて、翌年の春に芽を出し新しい群落を形成

することもあるようだ。切れて「流れ藻」となったアマモの花についた株が、内湾水と外洋水が混ざり合う「潮目」に集まる。サヨリがアマモと一緒に潮目に集まってきていたという。潮目は好漁場でもあった。しかし、最近では潮目に集まるのは発泡スチロールとゴミばかりであると漁師さんが嘆いていた。アマモ場が消滅したために沖合いの魚たちのようすも変わってしまったようだ。アマモの草原では古くなった株が枯れると常に新しい株が生長してきて世代の交代が行われている。一本抜いてもまた直ぐに新しい株が生長してくる。アマモという生命体が創りだした秩序である。「草の根」の強さの根源である。環境悪化で内湾生態系の底辺を支えるアマモも本来の自然治癒力を失い病んでいる。人間の社会にも同じことが言えそうだ。

(19) 水産資源

藻場では色々な動物に出会う。大物では西オーストラリアのロットネスト島の海草（うみくさ）の藻場で、畳半分ぐらいのエイに出あった。一番の大物は海草のサンプル用の赤いネットにじゃれついて、ネットを噛みきってしまったアザラシの子供である。いつもアマモの葉の間で見かけるのはアミメハギ、底の方にはサビハゼがいる。春に良く見かけるのはヨウジウオ、タツノオトシゴ、キヌバリ、ウミタナゴ、メバルなどである。下田の鍋田湾でホウボウにであったときは驚いた。ホウボウのほうがよほどびっくりしたにちがいない。派手な胸ビレをめいっぱい広げて逃げていってしまった。マダイもアマモ場で見かけることが多い。これらの魚は葉上に付着している藻類を餌にしている巻貝やヨコエビ、ワレカラ、ヘラムシなどを食べている。アオリイカを見たこともある。静岡県の大瀬崎ではほうりこまれた海岸植物のトベラの枝にアオリイカが卵を産みつける。以前ここにはアマモ場があったのに、海水浴客の足にからまるので砂利をまいてアマモ場をつぶしてしまった。アオリイカはアマモ場を産卵場としている。卵からかえったアオリイカの子供はアマモ場で守られて育つのだ。トベラの枝では隠れがにならないし、餌にもありつけない。藻場が消滅すると水産資源も姿を消してしまう。

(20) 海の日

今年から7月20日が「海の日」となり休日である。岩手県の大槌町ではフォーラム「海」というシンポジウムが企画されている。地元で、木を植える運動や合成洗剤を使わない運動をしている漁業者、森と海の間を研究している人が話をする。木を切ると雨で表土が流出して栄養塩が土に浸みこまず、汚染も加わって海の資源が衰退すると言われている。このようなことを最初に言った人は、90年前政府の神社統合に対し鎮守の森を護る自然保護運動をおこなった南方熊楠だ。森、川、海の間は微妙なバランスで豊かな生物資源を支えている。折しも国連海洋法条約が国会で承認され、日本は「排他的経済水域」、二百海里の海域を管理することになった。日本列島の周辺海域の三六一万平方キロ（国土の10倍）もの水域を管轄することになる。日本周辺の海が豊かなのは、森林と肥沃な土壌が海へ栄養分を運ぶからだ。太陽の光がさしこむ浅い海では海洋動植物が繁殖する条件に恵まれている。暖流（黒潮）と寒流（親潮）がぶつかる沖合いでは多様な水産資源が育つ環境がある。日本の海岸線の長さはロシア、オーストラリアに次いで世界第三位である。しかし、自然海岸は約5割しか残っていない。豊かな海の幸を継承していくことが人類共通の義務となってきた。

(21) タチアマモ

岩手県の船越湾には丈が7メートル近くもある世界一長いタチアマモの群落がある。10メートルぐらいの水深で最もながいタチアマモの花株が成長する。深くなるにつれて光が少なくなるので背が高くなる必要がある。夏でも海面の水温は18度ぐらいで、真冬は3度ぐらいに下がることもある。一年中低い海水温ではゆっくりと時間をかけて成長するので丈が長くなるのだらう。細い茎の先の頭の部分には長さが70センチほどの葉が4から5枚

ついていて大きなハタキのような形をしている。海底からタチアマモの林を見上げると竹林の中にいるようだ。一番深いところでは水深16メートルのところで見られる。今年の冬から春にかけて海水温が低かったためか、岩手の沿岸では岩礁のコンブの仲間の成育が良い。しかし、3メートルより浅いところの砂地のタチアマモの群落の衰退が目立つ。南の方から分布を広げてきた種類なので寒さに弱いのだろう。10メートル以上の水深では、夏と冬との水温の差はそれほど大きくないので無事に成育しているようだ。夏の高水温もタチアマモにとっては枯れる原因になる。タチアマモが体験した自然環境の変化に対しては耐性を持っているはずである。しかし、人間が変えた環境に対しては耐性がないため絶滅しないように注意する必要がある。

(22) 玉手箱

四方を海に囲まれた日本には、羽衣伝説をはじめ海辺を舞台にしたおとぎばなしが多い。モンスーン気候帯の緑豊かな風土に培われた文化や自然観の中に、昔の人々の深い洞察がある。浦島太郎は亀を助けてあげたお礼に、竜宮城へ招かれ、乙姫さまから土産に玉手箱をもらった。乙姫さまが浦島にくれた土産は不老長寿の命であった。これを現代の私たちにあてはめると、玉手箱の中身は太古の生物の遺骸が埋もれてできた石油ということになる。自動車、新幹線、高層ビルや多くの科学合成物質を手にいれ豊かで便利になった。しかし、日本沿岸の海藻や海草（うみくさ）の藻場は、1970年代から高度経済成長と反比例するように衰退、消滅していった。フナの森も水田も潰されてしまった。「鶴の恩返し」という民話では、鶴が自分の羽で織った反物を主人公の与ひょうにあたえる。それを売って与ひょうは金持になるが、約束を破った与ひょうの前に鶴は二度と帰ってくることはなかった。浦島や与ひょうのように現代の私たちが、玉手箱や反物と引き替えに払った代償は大きい。自然生態系だけでなく文化まで失ってしまったからだ。

(23) 近代化

私が、今一番気にしている海草（うみくさ）の藻場が3つある。一番目は、岩手県の船越湾のタチアマモだ。丈が6～7メートルもある竹林のように見える。次は西オーストラリアのアムフィポリスである。海の笹藪のように見える。丈は50センチぐらいで、笹の茎のようにしなやかな細い茎が砂地から伸びている。水深は5メートルぐらいまでが限度で、水温は一年中20度ぐらいの温暖な海である。種子はマングローブのように胎生で、母木についたまま発芽し成長してから落下する。海水温と海の気象条件が作りだした、タチアマモとアムフィポリスは陸上植物と同じ様な竹や笹の群落のように見える。三番目は南太平洋のフィジーにあるポウバアマモの草原である。細い棒のような葉を2～3枚つけた海草で、広々とした起伏のある海中の牧場のように見える。首都スバから70キロも離れた珊瑚礁の島には、30世帯80人ほどが住んでいる。最初の調査から2年後には、井戸が掘られ生活は近代的になった。そのせいか部落の前の藻場の海は透明度が悪くなった。黒髪のようなラン藻が海底の砂地を覆いつくし、それが枯れると懸濁し濁るようになった。近代化がもたらす生態系への影響は大きい。最後の秘境でも、近代化というパンドラの箱があけられようとしている。

関西支部事務局長総括

関西支部は出来るべくして出来、つぶれるべくしてつぶれた。つぶれたと言うより、発展した結果が現在の姿であるのかもしれない。学生時代の自由な雰囲気をとことんまでつきつめれば会という形を作るのとは違う形になるのかもしれない。

生物学会関西支部は滋賀大学555研究室において初めて成り立つグループであった。それは胃袋と空間(555)と自分勝手なことをできる自由にもとづいていた。この生半かな自由のグループは真面目に学生生活をエンジョイしようとする多くの極めて正しい人達とぶつかり自分たちの生活世界を狭めてしまった。(狭めてしまったのは一部だけと違う? 私ら、めちゃ広がったよねー。エンジョイしてだしねー支部長:倉)(わしも広がったで:支部長)

また、自分勝手な私達の世界においては、まとめる人を欠いていた。まだ、事務能力を欠いていた。口だけで人を使い文字を書けない支部長のくるみさんと(良いことや。教師にとっての期待される人間像や:支部長)、楽しいことは大好きで自分からは始めない倉田さんと(えー! 今日の総会を企画したのは私だよー。絶対ひどいわ。辻さんこそ何にもしてないくせに。ま、今回もおいしいもんを食べて楽しんだけど:倉)。後ろから手を引くのがうまい橋屋さん(裏取引が好きで夜に活動する:支部長)と、夜遅くにサロンの雰囲気と餌に引かれて集まる中谷、白井両氏と。(スペシャルメニューは、橋屋氏、旗守氏、白井氏がとってきたマツタケ、うまかった。:倉)。(わしたべてへん! スルイぞ:支部長、辻)。そして、これらの人々の個性の中でほんろうされる私(辻)と。あと恐ろしそうー辻。(また、こんなこと書いとる! だから、ほんろうされていた人々は他にもっといるって。:一同)

強制無しに、餌(食事)もなしにこの様な組織を維持することがどれだけしんどいか。多くの組織が(革新勢力や保守勢力やなんらかの宗教組織をとわず)、特定の信条(精神的脅迫)や権力や強制や餌を用いて集団の結束をたかめていることに対して我が生物学会の結束力がどれだけ無力なのか。

他方、本部はどうであったか。これは、奥野会長の独裁であり、会長職を譲ると言う世にも恐ろしい権力であり(何か書かんかったら会長にさせるぞ、というのは怖いよねー:一同)、大学の物品を利用して世の中の週刊誌より面白い雑誌を送ると言う餌であり、といった世の中の常識とはまったく違うことをしながら、世の中の方法を用いる奥野さんの巧みさであった。

関西支部には奥野さんがいなかった。これは、不幸なこと(?)であった。私達は、自由を追いかける一つの場所として関西支部を位置づけ、その流れの中で今はやりの発展的解消をしようと考えた。本当の自由を求めるにはこの様な方法しかなかったのだろう。(こんなに深く考えていたっけ:倉。おもしろいからやってみようってただけや:支部長)

とりあえず今回は総括であるが、もしかしたら中間報告であるかもしれない。なぜなら生物学会の本部が消滅するかもしれないだけだからだ。(え、本部がつぶれへんかったら支部はつぶれへんの? でも、支部の会員、ばらばらになってるで。新漚いった人もいるし、三重はどうなるの? さあ、どうしよう) つづく(かもしれない・・・)

最後に、やっぱり、本日の臨時総会でも支部長は口だけ。

文章にしたのは、辻と倉田だったのはいうまでもない。

生物学会関西支部臨時総会報告

10月最後の日曜日。臨時総会が石川県で催される。

倉：学会誌読みましたか？ 生物学会の本部が消滅するそうですよ。

支部長の息子：っていうことは、もうなくなるってこと。

支部長：関西支部といったけど、どこまでが関西支部？って言ってる間に本部がおわってしまったな。

倉：でね、学会誌の最後のページに何か書くようにって会長からの指令、のっているんだけど、どうしましょう？ 辻さん読んだ？

辻：うん、読んだ。

倉：ところで私、係、何だったっけ・・・？

ここで、自称、関西支部のこれまでの経緯を少し、まとめてみましょう。

関西支部の発足宣言をしたのは、かれこれ何年前・・・3年前の夏、動物研究室の夏の集中授業に、会長が来られたのがきっかけ。2枚舌、3枚舌（嘘つきというのではなく、うるさい）の支部長を中心に会則に則り、勝手に支部が作られた。運営の仕方でも会則に則っていたものと思われる。ただ、支部長は口だけ、最も深刻に会の行く末を考えていたと思われる倉田は楽しいことが大好きなだけ、自称事務局の辻氏は仕事をせず（このメンバーにいじめを受けながら、ほんろうされながら、何かをするのはあまりにも難しい：辻）今日の総会に名前を入れてネと言っていた橋屋氏（名前、ちゃんと出しておきましたよ：辻）は、食糧調達以外何もせず、他の会員は・・・と、いうわけで活動内容は不明。ただし、支部長はよくしゃべって、会の団結に寄与した、と言っている（混乱させただけとちゃうか！）。また、会計と会員の生活指導を行っていた倉田は、けっこう仕事をやっていた（例えば、会員と会員外の人々の仲裁とか）と、言っている。そこで、

主な活動報告（いいかげん）。

まず、奥野会長に結成の挨拶をしに、金沢大学に乗り込む。イワナ料理を御馳走になる。（めっちゃめっちゃおいしかった。ありがとうございます：当時の一同）（今日もこんなに近くまできているのに残念：一同）（料理の参考にさせていただきました：くるみ）さらに、そこで実際に存在するか否か疑問であった、第1編集局長と出会う《これは第6編集局長の間違ひ》。（第6局長にも出会う《これはたぶん第7局長》。でも、F女史には会えなくて残念《会えなくてよかったと思うよ＝以上、会長の注》）

その後、議論を戦わせ、会長の本を読み（会長が（を？）嫌いな人の本もようけ読んだ：支部長）、食糧を調達し、大学に住み着くことを学ぶ。人間関係の複雑さも学んだ。そのやり取りを報告書にしてやろうと、観察もした。（でも、みんな形になってないよね：倉）（だって、形にすることを目的にしてなかったでしょ：辻）

《この原稿についていた手紙》

前略。

奥野先生、お元気ですか？ 《元気じゃない》

“全員なにか一言書け！”ということでしたので、関西支部からのつまらん原稿をお送りいたします。《ほんとに「つまらん」な》

のせるかのせないかは先生が決めてください。《会則に「受けつけた原稿は、無審査・無修正のうえ、無責任に掲載する」と書いてあるから、載せたくないと思っても載ってしまうことになっている》

また一度先生にお会いしたいなあと、みんなで言っています。《会いたくない》

これから寒い季節となりますが、お体を大切になさってください。《大切にしてほしいのなら、こんな原稿寄越すな》

雑木林が残されるために必要なもの

田 亀 源 五 郎

たいへん気になる新聞記事が目にとまった。そこで、ちょっと一言？書くことにした。新聞によると、ある有名なアニメ映画監督が埼玉県と東京都にまたがる雑木林を残すために自分が関係する会社から3億円もの寄付を申し出たという。この雑木林の持ち主である不動産業者が破産して、雑木林を宅地として売り出す計画が持ち上がっていたそう。 (やっぱりこの国は金が、ものをいうんだねー。そんなことはずっと前から分かっていたけどね。) 何でも映画監督は「開発で次々と消える雑木林をひとつぐらいは残したい」と話されていたそう。私も雑木林を散策するのは好きだから、雑木林を残したいと思う。けれど「ひとつぐらい」とは思わない。小さな雑木林でもいいから、あちこちに残したい。ゴミゴミした都市近郊には、雑木林が児童公園のように点在してくれているとありがたいと思っているのでね。まあ、いずれにしても思っているだけだ。行政の動かし方は知らないし、何しろ私には3億円なんて金はない。

この映画監督は、「開発されれば、私は挫折感で引越すことになるだろう。それほど愛着のあるところなのです」とも話していたという。なるほど地元の方なのですね。地元のことは地元の人が決めるのが一番よいですね。(3億円もの金を出す力のある人でも“挫折感”をあじわうものなのか、私などは金も無いが“挫折感”もあじわったことがない) 私にも、かつて「愛着のある」雑木林があった。雑木林に隣接して、もとは水田だったであろう湿地があるところだった。いわゆる谷戸とか谷津田と言われる環境だ。私は、そこで鳥をながめたり、サンショウウオの卵をひろったり、朽木を獲して越冬中のスズメバチをほじくり出したりして遊んだ。ある日のこと背広を着た数人の大人たちが雑木林を歩いていた。見慣れない人たちだと思っていたがその中にはその市の偉い人の姿もあった。その後、雑木林の中にはフィールドアスレチックの施設ができた。(これは市の職員の手作りということでけっこう評判になった。) そして湿地は埋め立てられグラウンドになった。(この国で評価されるのは勉強とスポーツと有名になることだけだから、評価されることを求めない少数の子ども遊び場より、評価されることを求める子どもが勝ち負けを競うゲームをするグラウンドの方が求められるのだろうか。) 私は反対の声を上げたかったが、その頃は中学生だったので反対運動の仕方さえしなかったし、いずれにしても土地を買い上げられるほどのお金なんてないのだからお話しにならない。しかしこの新聞記事を見てあらためて思った。やっぱりお金の力はすごい、たいていの事はお金が解決してくれる。(こういうことを書くと、「そんなことは無い、お金で買えないものだって・・・」と説教を言う人がいそう。だがそういう人はお金に不自由したことの無い人に違いない。) 反対運動ができなくてもお金さえあれば「愛着」をも手に入れられるのだ。

反対運動と言え、やはり同じ新聞記事によると、この雑木林を保全するために、地元の自治会や自然保護団体などが、この映画監督を会長にした協議会を結成して一口千円の募金で50万円集めていたという。つまり一人が一口ずつ募金していたとしたら500人の人がこの雑木林を残したいという意志を示していたのだ。いや、募金の呼びかけを知らない人もいたろうし、残したいと思っているけど募金しなかった人もいるかもしれない。いずれにしても映画監督が3億円を出す前から、市民の中に雑木林を残したいという声はあったわけだ。はたして行政は市民の声を知らなかったのだろうか。知っていたけれども3億円もの金を出せなかったのだろうか。それとも出せたけれどもそんな市民の声は無視していたのだろうか。何人かの市民の声ではなく、行政の力でもなく、金を持つ個人の決断が土地のありかたを左右してしまう。いかにも日本らしい。まったく、この国の土地問題、金以外の力でどうにかならんのだろうか。

私は生態学の内部にいる者ではないのだが、どうも生態学に興味を持っているようで、少ないながらもかつ偏りながらも、何冊かの生態学関係の本を読んできた。そこで何の脈絡もないが、日本生物学会が消滅するこの機会に、自分が生態学に興味を持ちはじめた頃に、読んだ本と読まなかった本のうち何冊かを題材に、あれこれ思いつくまますを記してみたいと思う。

◎『生態学入門――その歴史と現状批判』奥野良之助著 創元社 初版1978年10月20日

いまさら、生物学会誌にこの本のことを書くのは気が引けるが、品切れということだし、若い会員の方の中には読んでいない人もいるかもしれないので書くことにした。

ところで、この本を読んだことのある皆さんは、どんなときに、どんなきっかけで、どんな目的で読んだのだろうか……。私がこの本を手にしたのは十数年前の春のこと。その頃私は大学入学を目前に控えていたのだ。私は環境問題とやりに興味をもっていたので、大学に入ったら生態学を学んで、環境問題の研究をしてやろうなどという大望を抱いていたのだ。だから、この本もその流れで読みはじめたのだった……。

装丁は地味ながら、読んでみると、知らない用語や人名は続々と出てはくるけれども、なかなか面白い。中でも印象的だったのは第1章の「環境」（その中でも公害の二つのとらえ方）と第4章で展開される「生態系」概念の批判である。

さて、その「生態系」だが、環境問題を云々するとき、この生態系という言葉を使うと何となく環境問題のしくみがわかった気にさせられるようである。これはつい最近のことだが、環境問題について、ある20代の男性と話をしていたら「人間が出したゴミで野生動物が被害にあっているということは、つまり生態系が破壊されているということで……」と、お説教されてしまった。会長がこの本を書いたから20年近くたつというのに、どうも一般的には自然破壊あるいは環境破壊は生態系の破壊であるにとらえられているようだ。生態系＝エコシステムはカタカナ「エコロジー」のキーワードであり、環境問題を語る上でのキーワードになってしまっている。最近のこの傾向は、80年代後半からパブル崩壊まで続いて、環境問題はもはや地球規模のものだけになっていると喧伝されてしまったように思える。（70年代のエコロジーブームを第1次ブームとすれば、この間の第2次ブームには生態学者が登場しなかった。この本で批判されている生態学者がかつて担った役割を今度はマスコミが担ったとでも言えようか。）その際エコロジーとかエコシステムとか生態系とかいう言葉が飛び交っていたように思う。その結果、環境破壊は生態系の破壊なのであるというとらえ方が一般的になってしまったように思えるのだ。（……思える、思う、思えるのだ。と逃げ腰の文末が続くが仕方ない。データがないのだから。）こういうとらえ方を当たり前になっている人たち（日本生物学会の会員にはそういう方はいないだろうが）には、是非この本の第1章「環境」だけでも読んでもらいたい。（もっとも第1章を読んだらその先を読まずにはいられないだろうが。）何しろ公害＝環境破壊というとらえ方からして再考を迫られるのだから。

現在、品切れとのことだが、復刊が待たれる。『磯魚の生態学』とは逆にソフトカバーが良いと思う。何しろ入門書だ。気軽に手にとれる方がよいだろう。内容が古いという意見も出るだろうが、『その歴史と現状批判』の本なのだから、『現状批判』も「その歴史」ととらえて読めばよいのである。とはいえ、復刊のあかつきには、「新版へのやや長めのあとがき」をつけていただき、新刊時の時代背景やその後の著者の活動に触れていただきたい。できれば著者以外の方の冷静な解説をつけていただいた方がよいかもしれない。

なお、信じられないかもしれないが、この本はTN大学の図書館には課題図書というコ

ーナーに何冊も並んでいた。いったいどういう人が課題にしたのだろう。サブタイトルを見ずに書名だけで判断して購入してしまったのではないだろうか。

◎『生態学入門』梅棹忠夫・吉良龍夫編 講談社学術文庫 初版1976年

会長の『生態学入門』（以下わずらわしいので単に『生態学入門』と言ったら会長の著書をさすことにする。）と同じ書名だがまったく違う中身。生態学用語が並んだ用語辞典のような本である。なるほど、もともとは『人間科学の辞典』という本の「環境」の項だったそうだ。「環境」の項がなぜこのような書名で発行されたのかは、まえがきに書いてある。

この本の中に「人間生態学」という用語の解説がある。何やら読んでみてもよくわからないが、日本生物学会誌第22号・26号にある本郷支部長著「人間生態学への招待」（この論文はすばらしい！ 東大生の中にもこういう人がいるんだなあ・・・）の「人間生態学」とはどうやら違うようだ。

まあ、この本についてはたいして書きたいことはなかったのだが、会長の本が学術文庫に入っているものと間違える人がいるといけないなあ・・・という親切心から取り上げた。なお、この本はTN大学の造園関係の学科が何かの科目の教科書に使っていたと思う。

◎『磯魚の生態学』奥野良之助著 創元社 初版1971年

先頃、新装版が出されたたいへん有名な？本なので、この本を取り上げるのもやはり気が引けるが、まあよいではないか。何しろ名著だ。私の知るかぎりでも、けっこうあちこちに参考文献として取り上げられている。（だから名著というわけではないが。）それにあの『アニマ』誌の1991年11月号では「たんねんな観察と論理的な思考の積み重ねが、生物学の基本であることを改めて教えてくれる。この本からどれだけのことを学びとるかは、ひとえに読み手の感性にかかっているといえるだろう。」と絶賛されている。また『釣り魚カラー図鑑』（西東社）では「釣り人に役立つと思われる主な」本の一冊にあげられている。しかし『生態学入門』に夢中になっていた私は購入当初にはこの本を魚の本としては読まなかった。第5章まではあっさり読み、第6章「二つの生態学」を熱心に読んでいたのだ。そう、私は生態系概念の批判に熱中していたのだ。（生態系概念に興味のある人は『生態学入門』とあわせて是非読んでください。）なぜ生態系概念の批判に興味があがっていたかといえば、やはり生態系概念が環境問題を考える上でのキーワードだと思い込んでいたせいだろう。なお、第5章までを熱心に読んだのはその後、機会があつて実際にタイドプールでニザタイやオヤビッチャ、メジナなどをじかに見てからである。それまで海は嫌いだったが、魚たちを見てから海が好きになってしまった。そして自分の見た魚の生態を知りたくなくて、何か適当な本はないかな、と考えていて「そうだ！ 『磯魚の生態学』には魚のことが書いてあったんだっけ！」と思い出すというか何というかで、あらためて読んだのでした。そしたらけっこう面白かったのだ。

知人のTさんによれば「『生態学入門』は奥野先生が何を考えているか分かる本」で「『磯魚の生態学』は奥野先生が何を考えているかが分かる本」とのこと。なるほどもっともである。（そうすると、『金沢城のヒキガエル』は何をしていたかも何を考えているかも分かる本ということになるだろうか。）序の最後にある「生態学は貧乏人にもできる科学であるということがわかっていただけたら幸いである」という文章は貧乏学生だった私には励みになった。（まあ、結局生態学の道には進まなかったのだから何の励みになっていたのだからよくわからないが。）

◎『比較生態学』伊藤嘉昭著 岩波書店 初版1959年 第二版1978年

大学に入学して間もないとき、私が「生態」をやりたいとある先輩に言ったら、その人は数学が苦手なはずなのに「それなら伊藤カシヨウの比較生態学と沼田真の本（書名は指定されなかったと思う）を読んだほうが良い」と言った。先輩は親切で言ってくれたのだ

ろうが、そんなことを『生態学入門』を熱心に読んでいる最中の新入生に言たって聞くはずはなかった。いまだにこの本も沼田氏の本も読んでいない。でも古本屋さんで見つけると、いつも気になる。かなり有名な本のようだし。(私はひねくれ者のくせに有名なものに弱いようだ。)なお、その先輩に日本生態学会誌Vol. 34, No. 7の114ページにある「なお、本研究は文部省科学研究費補助金を受けずに行った」という会長の文章を読んであげたら慄然とされてしまった。私は面白がってくれると思ったのだが、面白がってもらえなかった。なぜだろう。そういえば『科学』Vol. 52, No. 7の「生態学に必要なものは《対話》か?否!」(伊藤嘉昭)の中に次のような一節がある。「私のまえに、あるとき生物の好きな学生があらわれ、“大学院に入って生態学を専攻したいが、その前に研究生として置いてくれないか”と尋ねた。私が“生態学をこころざすなら数学を相当やる必要があるよ”といったところ、その学生は“奥野良之助の本[『生態学入門』のこと-筆者注]をみると数学などいらないようですが”と答えた。」・・・私はこれを読んで笑ってしまった。この人は伊藤先生を怒らせるためにこんなことを言ったのだろうか。それとも“奥野良之助の本”で批判されている当の本人だと知らなかったのだろうか。そんなことは考えにくいけど・・・。いずれにしても、生態学を専攻したい学生に『生態学入門』が入門書として読まれたのは確かなようだ。

◎『現代科学と公害』 宇井純編 勁草書房 初版1972年

『生態学入門』を読んで名前を知った先生はたくさんいて、宇井純先生も川那部先生もそうなのである。私が『生態学入門』を読んだ当時、宇井先生はまだ東大にいて講演会などがあったので何度か話を聞きにいった。この本を購入したのは自主講座「公害原論」での川那部先生の講演録である第5章公害と生態学II(川那部浩哉)を読みたかったからである。

・・・以降、川那部先生の書いたものはいくつかに読んでいます。

さて、それで表題の本から話はそれる。はじめに「偏りながらも、何冊かの生態学関係の本を読んできた」と書いたのは、自分でそう思うからなのだ。この偏りはちなみに、ある先生方の言葉を借りれば「“二つの生態学”のうちの一方の立場」(『科学』Vol. 52, No. 8, p528)に偏っているという意味になりそうだ。この『科学』掲載の論文で「一方の立場」の例として上げられている文献は渋谷寿夫著『生態学の諸問題』『理論生態学』、奥野良之助著『磯魚の生態学』、川那部浩哉「二つの生態学—形而上学的覚書—」である。私はこの内『生態学の諸問題』以外は目を通している。しかし、この論文で“二つの生態学”に対する立場?として上げられている E. R. Pianka 先生の本も伊藤嘉昭先生の『比較生態学(第2版)』もその他の「もっぱら r・K 選択説にみられるように、繁殖率の進化と環境条件との機会的対応に終始している」本も目を通していないからである。(しかし、先に上げた四つのうち三つの文献は、みなそれぞれ言っていることが違うように思える。だから「一方の立場」と入っても一括りにはできないように思える。)まあ、なぜ私が「偏って」しまったかという生態学に興味をもちはじめた頃に奥野会長や川那部先生の書いたものを読んで「なるほど」と思ってしまったからだと思う。これは先生方のせいにはしていない。「なるほど」と思ったのは私なのだし、その後、主体的に「偏った」読書をしたのは私なのだから。

◎『一生態学者の農学遍歴』伊藤嘉昭著 蒼樹書房 初版1975年

『生態学入門』の中に「生態学の危機」(伊藤嘉昭・『自然』1973年4月号~9月号)という論文のことが出てくる。そこで私は、批判されている側の文章も読まねばなるまいと思ってか、大学の図書館で『自然』のバックナンバーを開いてこの一連の論文を読んだ。(もちろん「生態学の危機」によせて—伊藤嘉昭氏への反批判(奥野良之助)も読みました。)この本はどうやらそのあと読んだようだ。そのころ政治的なことはほとんど知らなかった「無垢な」学生だった私は「生態学の危機」とこの本を読んで、その背後に政治

的な気配を感じ、妙な不安感のようなものを感じたのを思い出す。率直に言えばこういう世界に首を突っ込むのはやめた方がよさそうだった。

ところで、今あらためて、この本をめくっていたら「戦前の昆虫学は、鳥学ほどではないにしても金持ちの趣味的な学問の色彩を強くもっていた」という記述が目にとまった。なるほどそうなのか、いや今でもそうなのだと思う。昆虫採集をして標本をたくさん集めるなんて、今だってよほど裕福な人が広い家に住んでいる人でなきゃできっこない。狭い家に住んでいたのでは標本箱の置き場所がないではないか。そもそも生物学自体に金持ちの趣味的な匂いがついて回る。私はどうもそれが嫌だ。でもこれは生物学に限ったことではないのだろう。そういえば、お堀に囲まれた大きな城に住んでいる人達の中にも生物学の“御研究”をしている人がいたっけ。何でもその中のお一人は博士号まで取得されたい。そうでなくとも“えらい”のにドクターまで取ったらますます“えらく”なってしまうではないか。

話は飛ぶが、いつだったかの「アニマ」誌上で生物学関係の本は売れないなんて記事があったけれど、庶民の生活から遊離したところにある生物学関係の本がそもそも売れるはずないじゃないか。そもそも本自体がなくなったら人の生活は成り立つのだし。(以上はかなり自虐的な物言い。)

◎『人と生き物48講』 奥野良之助著 どうぶつ社 初版1979年

会長の本のなかではもっともリラックスして読める本だと思う。グラフも表も図も出てこないが、絵はたくさんついているし、一回の講義は短い。しかし、この本の装丁の絵が樞であることに、危険思想の本だという意味がこめられていたとは知らなかった。(こんなことを書いていたら48号が届いた。会長によるとなんと「社会の変動を引き起こそうと企んで」書いたとのこと。ウーム、そんな本をリラックスして読める本などと言ってしまってもよかったのだろうか。リラックスして読んでいるうちに危険思想が浸透するしかけなのかもしれない。)

危険といえば、この本の第48講には、なにやらおだやかならぬことが書いてある。みなさんお気づきだろうか。それは 214ページである。そこには次のような文章がある。「現役を退けば、一応の格好をつけなければならなかった「表」家業から足を洗えます。のこるは得意の「裏」家業のみ。我ら老人は一致団結、数の多さにもものを言わせ、その時の中年・若者にひと泡ふかせようと考えているのです」。会長が現役を退くまではあと半年、退官後にいったいどんな方法で我々にひと泡ふかせようと考えているのでしょうか。そろそろ具体的な計画を練っているのかもしれませんが。知っている人は教えてください。

農林水産部長

朝日新聞の1996年9月11日の東京多摩版に、東京都武蔵野市にタマムシ・コクワガタ・ミドリヒョウモン・テングチョウ・・・などの昆虫が戻ってきたとの記事が載っている。この中で復活の理由のひとつとして農薬の散布量が少なくなったことが挙げられている。アメリカシロヒトリの駆除のための農薬の散布が減っているのだそうだ。殺虫剤の散布が減って、人々の目を楽しませてくれる昆虫が都会に増えつつあることは、都会の人々にとってたいへん喜ばしいことなのだろう。そもそも、誰だって好き好んで人間の体にも有毒な薬をまいている気はないだろうから農薬散布が減ったり無くなったりすることは、もちろん健康のためによいことだ。

それで話はポーと飛ぶのだが、数年前ある自然保護団体？主催の集まり（シンポジウムとでも言えばいいのだろうか）があった。岩波新書から『日本農業事情』という本を出している河野修一郎さんという方と東京水産大学の水口憲哉先生、それに神奈川県で自然保護活動をおこなっている方の3名が講演者であった。河野氏の講演の中でビデオを見る機会があった。都会の人は農家が農薬の使用を非難するが、農家がなぜ農薬を使わざるを得ないのかを説明するために河野氏はそのビデオを用意したのだ。なのに主催者の司会者は「私たちはながら族ですから」と言って質疑応答をしながらそのビデオを見ることにしてしまった。私の記憶では河野氏はそういう形ではなくきちんと見て欲しいと、このことに抗議していたが、聞き入れてもらえなかった。私も非常に腹立たしく、声をあげようかと思っただが、会場のまんなかから声を出す勇気がなかった。（あー情けない。）さもありなん、ビデオ上映終了後の何人かの発言を聞く限り、意図をきちんとくみ取っていた人はいないようだった。こういうことがあると、農薬の被害をもっとも受けやすいのは農家なのに、自然保護の人達は人間の被害には興味がないのだろうかと思ってしまう。また、その後、講演者の一人である神奈川県で自然保護活動をおこなっている方からか司会者からか忘れたが「魚の養殖はいけない。野生動物の餌を奪っているから」という趣旨の発言が飛び出した。これにはさすがに水口先生が、ではあなた方は肉も食べないというのか、という趣旨の反論をされたが、時間の都合からか議論にはならなかった。（このときは壇上に3人の講演者が並んでいた。）こういうことがあると、自然保護の人達は人間の生活には興味がないのだろうかと思ってしまう。「養殖はいけない」という理屈を押し広げれば、畜産はいけない、ひいては農業はいけないということになってしまう。そうすると人間も野生動物と同じように、自然にあるがままの生物を採取して生きろということになってしまうではないか。

ところで先日ある薬品会社の家庭園芸用薬剤のカatalogを見ていたら、不快な虫用の殺虫剤が載っていた。園芸作物に被害を与える虫でなくとも、気持ちが悪い奴は殺してしまえということらしい。何ともおそろしいことだ。

農林水産部長

里山という言葉が使われ始めたのはいつ頃からだろうか。私の記憶では数年前、新聞で目にしたおぼえがある。そして、里山という言葉が使われ始めたそのときすでに里山は守られるべき対象とされていたように思う。というより守られるべき環境に里山というネーミングが与えられたというべきかもしれない。『科学朝日』が“里山のエレジー”なる特集を組んだのは1990年のことだが、エレジーというあたりに滅び行くものというイメージがある。だがしかし、ほんの十数年前までは人為的自然である里山が自然保護の対象として新聞や雑誌に取り上げられることは、私の知る限りほとんどなかったと思う。マスコミが扱う自然保護の対象の自然といえば知床や白神山地のように学術的にも貴重な「原生」的自然だけだったように思う。だが、生物は好きだが山登りや探検はしない私が馴れ親しんできた自然もそうではなかろうか。十年近く前、ある大学院の教官に「雑木林を人が関わってきたという観点からとらえた上で、その保護を考えたい」という旨の小論文を読んでもらったことがある。「君の気持ちは分かるが、それは科学にはならない」と一蹴された。だから私は里山という環境が自然保護の文脈の中で語られはじめたとき「やっとみんな気付いてくれたか」と随分生意気なことを思ったのだった。いまでは随分里山なる環境も大切にされているようだ。あの「となりのトトロ」なる映画の影響もあるのかもしれない・・・。

さて、私は何を言いたいのか。言いたいことは幾つかある。

どうも最近、こうも里山という言葉が流布されると、今では目触り、耳触りのよかったこの言葉に疑問を感じてしまうのだ。さて、里山とは何ぞや？ ちなみに守山弘著『自然を守るとはどういうことか』（農山漁村文化協会、1988）は、いわゆる里山の自然について本格的に論じた初めての、画期的な、本であると言ってよいと思う。しかし、たしかこの本には里山という言葉は出てこなかったと思うのだが・・・。（調べてみようかとも思ったが、読みなおしていると締め切りに間に合わなくなりそうだし、いま手元にないのでやめた。）広辞苑を開くと「山里」は載っているが「里山」は載っていない。載っていないから、自分で定義づけをしてみよう。「里山とは、薪炭林・水田・溜池・用水・畑などを含む農業環境である。」いかがでしょうか。おおむね間違っていないと思います。里山とは人間（農家）が関わって出来た自然だと思うのだ。写真家の今森光彦さんに『里山物語』という写真集がある。その中に田植えの終わった田の写真が載っている。そしてその写真の片隅には手押し田植え機が写っている。これは私の勝手な解釈だが、里山は人がつくってきたんだ、あるいは人が関わってきたんだと言いたくて今森さんはこのようなページを設けたのだと思う。しかし、「なんでこういう写真が入っているんだろう」と思う人もいるのではないだろうか。最近では里山という言葉がひとり歩きしてしまって、里山が、農業いや農家がつくりあげてきた環境だということが忘れられてしまっているのではないかと思うのだ。もし、そういうことを抜きにして里山の自然を守ろうというのは、どこかに大事なものを置き忘れてしまっているような気がするのだ。

まあ、いずれにしても里山の自然を守ろうという動きがあることは確かなようではある。さて、それで、どこそこの雑木林で夕力の営巣が確認された。夕力の繁殖地として貴重だからどこそこの雑木林を守ろう！ というような話があったとしたら、私は咄嗟に「ちょっとそれ違うんじゃないの？」と思うだろう。そういう守り方だと、原生的自然の保護の場合と同じで、どちらかという自然のための自然保護になってしまうのではないか。そうするとそれは、人を排除する方向に進んでしまうのではないだろうか。里山の自然は人間が生産の場所として利用してきた環境である。そして、生産の場所であるとともに子どもの遊び場でもあったわけだ。田んぼでのザリガニ採りやカエル採り、雑木林でのクワガ

夕採り等々……。そして町場の子は、ザリガニを採るために田んぼに入り畔を壊したりして注意を受け、そこが生産の場であることを学習していったのではなかったか。

農耕のはじまりが自然破壊のはじまりという議論を耳にしたことがある。しかし、里山の歴史は、人が自然に手を加えることは必ずしも自然を破壊することではない、あるいは貧困にさせることではないということを見せてくれているのではないだろうか。そして、生き物を増やそうと意図してそういう環境がつけられたのではなく、結果として生き物が増えたのだということ……。だから、雑木林や田んぼの自然を表現するときに、必ずしも里山と言わなくてもいいのではないのだろうか、薪炭林とか田んぼとか具体的に言った方が、関わっている人が見えてくると思うのだが、いかがだろうか。

だが、里山という言葉が広く親しまれることによって農業が見直されるのかもしれない。そうだとすれば、この言葉にとやかく言うつもりはない。

《余談》ピオトーフ

最近、ピオトーフという言葉聞くが、何かこうしっくりこない、言葉の響きが。どうやらドイツ語らしく、あのヘッケル先生がつくった言葉らしい。ある本によればその定義は「野生生物の生活する自然環境」で、さらに正確にいうと「自然生態系が存在する、あるまとまりをもった環境」ということになるそうだ。そうすると奇麗な熱帯魚の泳ぐ珊瑚礁はピオトーフかもしれない。会長が長いこと潜ってきた磯の海もピオトーフかもしれない。たくさんの新世界ザルがくらすアマゾンの熱帯雨林の樹上もピオトーフ《これは「ピオトーフ」だね=会長》かもしれない。土壌動物がたくさんいる林床もピオトーフかもしれない。まあ、それらもピオトーフなのかもしれないが、どうも最近言われているピオトーフとはそういうのではなさそうだ。藁葺き屋根の木造家屋とか、石垣とか、積んである薪とか、コンクリーで固めてない川や池とか、らしい。なんだ、日本の農村の景観じゃないか……。

里山を守ることにしても、ピオトーフ作りにしても、高度経済成長期ごろまでの日本の農村の形態を維持しようということになるのだろうか。

日本生物学会誌 最終号（上）
編集・発行 日本生物学会
金沢市角間町
金沢大学理学部生物学教室
223号室
編集無責任者 奥野良之助
許可無断転載